外道勇者の華麗なる旅路

雪道棗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
外道勇者の華麗なる旅路

【Ｎコード】
Ｎ９９３２Ｊ

【作者名】
雪道棗

【あらすじ】
顔は天使のように愛らしいが性格は極悪。
そんな少年が異世界に勇者として召喚された。
その少年は召喚された初日からやりたい放題。
そんな勇者にあきれた賢者が少年を女に変えてしまうが！？
果たして本題である魔王討伐はなるのか！？
女になってしまった少年はどうする！？

プロローグ

暗い。
飲み込まれそうな闇の中。
黒のフードを被ったいかにも魔女のような女がいた。

「ふぅー疲れた」

しかし、その女は物語でよく登場する老婆ではない。むしろ、瑞々しい肌を持った二十代前半と思われる用紙の女だ。

「お疲れ様です。はい、コーヒー」
「ん、あんがと」

微笑を浮かべる執事服の男にコーヒーを差し出されると、女は一息をつく。

「やっと終わったわね……」

どこか感慨深そうに呟く女。男も同意を示すように頷く。

「丸二日かかりましたもんね」

そうして見上げるのは、天井に届きそうな程の本の山。あまりの多さに威圧感すら覚えそうだ。

―――ここはとある図書館。人々の噂では、選ばれた者にしかその存在を知覚できないと言われている魔女のいる図書館である。
そして、この女こそ図書館の主である、稀代の魔術師を称されるエ

リーゼ・ローエンハイル。執事の男は最近魔女に雇われたばかりの男ーラウル・ハウィッドであった。

二人は今、書籍の整理をしていた。頭上高く積まれた本は、どれも相当痛んでおり、一目で年代物ということが分かる。そしてどれも魔術的価値の高い禁書ばかりである。エリーゼはこの禁書を改めて一目につかぬ場所に移動させるために仕分けていたのだ。それというのも、最近、これらの禁書の魔力が高まりすぎ、図書館内において怪奇現象が多発しているからである。エリーゼにはどうということはなくても、ラウルには危険極まりないのである。

「あれ……」

その中から、ラウルは見覚えのある一冊の本を手に取る。

「あっ、馬鹿！」

しかし、ラウルの行動に目を剥いたエリーゼに取り上げられてしまう。

魔術的耐性のない人間が触れていい代物ではない。発狂して気がふれてしまってもおかしくはないのだ。

「大丈夫ですよ。僕もそこまで馬鹿じゃありません。その本有名じゃないですか。僕も子供の頃に何度も読みましたよ」

勇者が魔王を打ち倒すという王道物語。この物語は実話としてしられ、それから二百年経った今でも、夢と希望のストーリーだ。誰もが勇敢な勇者に一度はあこがれたものだ。

「そういう所が馬鹿だって言ってるの。そんな本を私が禁書指定す

るわけないじゃない。あんた達が見てた本は都合のいいように内容が改変されてた偽物。真実とは天と地ほどの差があるわ。それでこっちが原本」
「真実とは程遠い？」
「ええ。あいつが勇敢な正義の味方？笑えないわね」
エリーゼが表情を歪めて嫌悪感を露わにする。
「もしかしてエリーゼ様は勇者様を知ってらっしゃるんですか？」
エリーゼは渋々頷く。
「す、すごいっ！！お話聞かせてもらえませんか？」
「嫌よ……面倒だわ」
「そこをなんとか！」
「うるさい！この話はここまで！さぁ、終わらすわよっ！」
「は、はい！！」
エリーゼは一方的に話を打ち切ると次々と指示を出す。ラウルは釈然としないものを感じながらも、指示に従うのだった。

その夜。
禁書図書室に一人の男の姿があった。
「どこかなー」
あれから何を考えていても、あの本のことが忘れられない。気になって夜も寝られず、ラウルは危険を承知で禁書図書室に忍び込んだ

のである。

「ん？」

しばらく歩いていると、何かを踏んずけたような感触。探ってみると、それはラウルが願い求めた勇者物語の原本であった。
ラウルは本を抱えると、素早く動き、一気に部屋のベッドのダイブする。
そして、改めて原本を眺めてみた。

タイトルは『魔王物語』

「魔王？」

勇者ではないのか？というラウルの至極当然の疑問。
しかし、そんなことは読んでみれば分かることである。
ラウルは生唾を飲み込み、そっとページを捲った。

――――それは勇者の物語。
――――それは魔王の物語。
――――それは一人の少年少女の物語。

1P　悲劇の幕開け

歓声。
耳をつんざくようなすさまじい歓声が辺りを埋め尽くしていた。そこはどこかの儀式の使用するような会場のようだ。俺を囲むようにして人々が叫んでいる。
中心に佇んでいるのは、一見少女と見まごうばかりの美しく愛らしい少年だった。その少年というのも、着ている服でようやく判断できるくらいで、もし女物の服を着ていれば誰も男などとは夢にも思わないだろう。
長めに伸ばされた艶のある髪、顔のパーツはすべてが黄金比というべきバランスで調和がとれている。肌は陶器のように白くきめ細かい。天使という言葉はまるで彼のためにある言葉のようだ。
そう一外見だけを見るならば…。

「うるせぇ…」

俺は心底うざそうに呟くが歓声はとても収まりそうにもない。
だいたいここはどこだ？
俺は自室で気持ちよく寝てたはずなんだがな…。
まぁ、理由なんてどうでもいい。
ただ分かっているのは、騒いでいるこの連中が原因だってこと。
理由は一つ。
この歓声を受けているのが俺だってことだ。

「お初にお目にかかります、勇者様」

ぶちぎれかかっていた俺をなんとか押しとどめたのは、清んだソプラノの声だった。

「あん？」

俺は声をかけてきた女に向き直り、とりあえず堂々と値踏みする。

豪奢なサラサラの金髪に蒼の瞳。肌は健康的であり、若さ特有の瑞々しさが全面に主張していた。少々、幼い感じもするが、十代後半くらいだろう。ゆったりとした巫女服のような服装のため、正確には分からないが胸もなかなかでかそうである。

「あ…あの…？」

「八十五点」

「えっ？」

少女が戸惑っうような表情を見せる？

「お前、可愛いな」

「へぅ！？」

顔を真っ赤にして素っ頓狂な声を上げる。なかなかに反応も初心でいい。

しかし、そんなことよりも今は優先させるべきことがある。

「お前が俺をここに？」

俺の問いに少女が頷く。

やはり、この女が俺をここに呼び寄せたようだ。

「ここは俺の住んでた世界とは違う？」

「…よくお分かりになられましたね」

「別に簡単な推理だ」

俺の記憶が正しければ、俺は数分前まで自室のベッドで寝ていたはずだ。そして、俺の見渡す限りの人間の人種はどう見ても日本人には見えない。

外国に拉致されたとも考えられるがそれはまずありえない。俺が気づかないはずがないし、常識的に考えてみてもありえない。あと考えられるのは、超常の力で飛ばされたということ。そうでなくては、今の状況が説明できない。そうなれば、元の世界以外と考えるのが自然だろう。

「で、お前らの目的は？」

「実は、最近、魔王という存在のせいで多くの人々が犠牲になっています。そこで古より伝わる召喚魔法にて勇者様をお呼びした次第です。勇者様にもご都合はあるでしょうがどうか我々にお力を貸してはいただけませんでしょうか？」

少女は深刻そうな顔で頭を下げる。

「お前、名前は？」

「エフィーナ・ラズル・シリベスタです」

「エフィーナか…俺の名前は安達棗。棗様と呼んでもいいぞ」

「は、はい。な、棗様」

エフィーナは俺のペースに巻き込まれているようでどこかぎこちない。

しかし、ここでやめる訳にはいかない。

それではおもしろくないし、さっき思いついたことが実行できない。

「ところでエフィーナは俺を勇者と言っていたな？」

「ええ、棗様はまぎれもなく選ばれし勇者でございます」
「そんなことは生まれた時から分かっている。俺が聞きたいのは、勇者の力のことだ。何かないのか？」
「言い伝えでは過去の勇者様はいずれも強大な魔術の使い手だと伺っております」
「魔術…魔術ねぇ」

俺は目をつむって意識を集中してみた。
なるほど、いつもは感じることない力を感じる。
それは大きく脈うっており、まるで二つ目の心臓のように感じた。
魔術とやらの使い方は分からないがとりあえず直感にしたがってみることにした。
流れるままに魔力を全身に循環させ、ゆっくりとその力を一点に集中させていく。
それは右手。
俺は目を開き、右手を見てみる。
そこには、とても勇者とは思えない禍禍しい漆黒の魔力の塊があった。

「おお！」
「こ、これは！？」

エフィーナが驚愕に目を見開く。

「どうした？」
「どうしたって…勇者様の魔力は常識を遥かに超越しています！」
「ふぅ～ん」

興奮気味に話すエフィーナ。
俺はというと、そろそろ集中するのに疲れたので、手の魔力を無造

作にポイっと投げ捨てた。その先には豪邸があり、豪邸は漆黒の魔力に触れた瞬間、跡形もなく消えうせた。

「さすが俺様！確かに常識を超越しちまってるな」

そこで俺はふと気付く。
いつの間にか歓声が止んでおり、俺を見る視線が好意的なものから畏怖や恐怖といったものに変わっていた。

「あれ？」

エフィーナも引きつった笑みを浮かべるだけだ。
俺は思わず笑みを浮かべる。
こりゃ簡単に目的が果たせそうだぜ。

「ひっ！」

音もなくエフィーナに近づき、耳元であることを囁く。

「……」

俺の言葉を理解した瞬間、エフィーナの表情は真っ青になった。

「さぁ、行こうか」

エフィーナは観念したように頷く。
目じりには涙が浮かんでおり俺の嗜虐心をたいそう刺激した。
それに泣くのは早い。これからたくさん泣いてもらうつもりなのだから。
俺とエフィーナが連れだって会場から消えるのを誰もが茫然と見送

った。
きっとその時の俺は酷く邪悪な笑みを浮かべていたに違いない。

主役が消えた会場である一人の男が呟いた。
もしかしたら彼こそが最も早く事実に気がついた人間かもしれない。

「あれが本当に…勇者？」

ちなみに俺がエフィーナになんて言ったかだが…。
俺はただこう言っただけだ。

「なぁ、お前のことを俺のものにしたいんだ…ああ、もちろんイエスだよな？もし違ってたら俺の魔力が暴走してここにいる人間がゴミのように消えてしまうかもしれんが…ああ、そうか、いい子だ。じゃあやろうすぐやろう」

エフィーナが進んで俺の所有物になってくれるなんて、やっぱり俺の魅力は罪深いものだ…ククク。

1P　悲劇の幕開け（後書き）

初めまして。
作者です。最後まで読んでくださってありがとうございます。
感想なんかもらえると嬉しいのでお願いします。

現状把握…そして破壊に向けて…

「ふぅ…」

俺が召喚されてから一夜が明けた。昨日の件で民衆は俺の事をいろいろと噂しているようだが、そんなことは正直どうでもよかった。朝日が部屋を照らすなか、俺はエルフィーナに入れさせた紅茶を傾ける。甘すぎず、苦すぎず、あいつは紅茶を入れるのがなかなかに上手いようだ。ここは、シックな色合いの調度品や沈み込むようなソファーのある豪華な部屋。エルフィーナの部屋である。

「さて…」

とりあえずは状況を整理してみよう。
俺は昨日、この世界『ヴェゼーラ』に召喚された。この世界は科学技術の代わりに魔術が発展しており、俺が召喚された王国『シリベスタ王国』は王と貴族からなる王権政治の元なりたっている。主要な国家は他に二国。軍事・帝国主義の『アレビアナ帝国』と様々な種族が暮らす『ワキナ共和国』。三国はほぼ同じくらいの国力を誇り、アレビアナ帝国とは対立、ワキナ共和国とは中立の立場にある。国力が同じくらいのため、ここ数年は表立っての衝突はおきていないがいつ戦争に発展してもおかしくないそうだ。

次に魔王について。
半年ほど前から魔物の群れは頻繁に町を襲いだすようになり、その動きには軍隊のような統率された様子が見受けられるようだ。歴史書を紐解いていくと過去にも何度か同じようなことが起き、魔王と呼ばれる存在に辿り着いた。
魔王は強大な魔力を誇り、冷徹で傲慢と言われている。

やがて、不安にかられた民衆が騒ぎだし、シリベスタ王国は民の鎮静化を狙い勇者を召喚した。つまり、本当に魔王がいるかどうかの確認はとれていない訳である。

「まったく忌々しい」

今すぐにでも国王の首を獲りに行きたいくらいだ。

「…棗さまぁ…棗さまぁ…」

俺はそんなうわ言を耳にとらえ、その声の主に視線を向ける。

「なんだ、そんなに嬉しいのか？」

「はい…棗さまに…ご奉仕できて…嬉しいですぅ…」

その視線の先には、俺は足に跪きながら恍惚とした表情で足に舌を這わせているエルフィーナの姿があった。

なんとまぁ、たった一夜でここまでとはな…才能があったのかもしれない。

それにしても、エルフィーナがこの国の姫だと知った時は驚いた。

さっき頭で整理していた情報も、ベッドの中でエルフィーナに聞いたものだ。

涙と処女の証である血を流しながら俺の下で悶えるエルフィーナの姿を思い出し、俺の口元に笑顔が浮かぶ。

「お前、仮にも一国の姫だろ？そんなんでいいのか？」

「いいんですぅ…私をただの女として扱ってくれたのはぁ…棗様だけですからぁ…」

ただの女って言うよりも玩具として…なんだな…まぁ、本人が喜ん

でるんだからいいだろう。

「じゃあ俺は出かけてくるぞ」

「え？」

なおも舌を這わせてくるエルフィーナを払いのけ、俺は立ち上がる。

「ど、どこに行かれるのですか！？」

「うるさい、そんなの俺の勝手だろうが」

「帰って…きてくださいますよね？」

涙目で俺を見つめるエルフィーナに俺は優しく微笑みかけた。

「当たり前だ。お前は俺のものなんだからな。分かったらちゃんと身体を綺麗にしておけよ」

「は、はい！」

嬉しそうに微笑むエルフィーナを後に俺は部屋を出た。

ところ変わって場所は街中。

人々の好奇と畏怖の視線の只中を俺は堂々と歩く。

エルフィーナの話によると、国内では国王派と貴族派の二つに分かれており、国王もこの状況には手を焼いているようだ。

なんでも、貴族派は反乱を企てているという噂がささやかれているらしいが、俺が思うにその反乱は近いうちに現実となるだろう。

貴族派のトップというのが、長年、国の財産を管理する立場におり、最近になって汚職が発覚したことにより没落寸前だそうだ。普通ならば、他の貴族派の連中もそんな奴には早々に見切りをつけるべき

だろうが、彼らにしても長年賄賂を受け取っており、断るに断れない状況になっている。
まぁ、早い話が――

「この国…腐ってんなぁ…」

それにつきる。
そして俺はというと、この国の膿を全部、国王に代わって一掃してやろうと直々に動いている訳である。なんとも優しい俺。

そんな事を考えているうちに目的の場所に辿り着いたようだ。
眼前に聳えるのは広大な土地と屋敷。小さな城くらいはありそうである。
俺はそのまま入ろうとすると――

「待て、貴様」

無礼にも俺にため口を聞いてきた奴がいた。
全身に纏っている鎧から察するに、警備兵か私兵といったところだろう。

「このお屋敷は筆頭貴族であらせるジャルバーン様のお屋敷だ。それ以上近づくのなら敵とみなし拘束する」

男は一八〇はありそうな身体で俺を威圧するように見下ろす。後ろにはあと二人ほどが控えていた。

「――ろすな」
「何？」
「俺を見下ろすんじゃねぇ！！」

俺は無意識で魔力を込めた拳で男の腹を殴り飛ばす。すると、屈強そうな男は一瞬で白目を剥き気絶した。どうやらこの男が責任者だったのだろう。控えていた二人はありえない事態に棒立ちになっている。それもそうだろう。身長一六〇あるかないかくらいの愛らしい少年の一撃で大の大人が容易くノックアウトされたのだから。俺は素早く動くと茫然としている男二人も思いっきり殴り飛ばして意識を刈り取った。

「まったく、どいつもこいつも俺を苛々させやがる」

俺はこの苛々はこの屋敷のある人物にさせることを誓って屋敷に向かい歩きだした。

「さて、待ってろよ、俺の玩具♪」

そう呟いた表情は何かを待ち焦がれた乙女ように美しかった……。

現状把握…そして破壊に向けて…（後書き）

最後までよんでくださってありがとうございます。
なんでもいいので、感想なんかくれたら嬉しいです。

勇者と忠誠

筆頭貴族ジャルバーン家。
前述した汚職事件を起こした一族である。
国を正すには、元になっている元凶を潰すのが一番。
手をこまねいていえる国に代わって俺が天誅をくわえてやろう。
そうすれば誰もが俺に感謝し、膝まづくに違いない。
俺は門をくぐり、広大な庭園を歩く。
さすが、筆頭貴族を呼ばれるだけはあり、よく手入れされており趣味はいい。

「誰だっ！」
「ここにいたぞっ！」
「捕えろ！！」

数人の私兵を叩きつぶし、俺はようやく屋敷にたどりついた。
とりあえずドアをノック。
しかし、反応がないので、魔法でドアを吹き飛ばす。

ドゴンッ！

轟音を上げながらドアが木端微塵になると、馬鹿みたいに広い屋敷の内部が明らかになる。
シャンデリアに彫刻、絵画。
ありとあらゆるものが値をつけられない程の一品だというのが一目で分かった。

俺は若干呆れながらも目を閉じ魔力を探知してみる。
魔術師は貴族に多いという。平民でもなれない訳ではないが、魔術

を教えてくれる学園とやらの学費がかなりの高額になるので庶民はなかなか入学できないそうだ。
さらに、貴族の間では魔術を扱えるというのは一種のステータスになっている。
恐らくは、シャルバーン家の奴らも魔術を扱えることだろう。

「これか…」

俺は屋敷のある一室に高い魔力を感知する。
この屋敷で感じる魔力はそこからだけである。まず、シャルバーン家の者とみてま違いないだろう。
まったく魔術とは便利なものである。
この広い屋敷を一部屋ずつ探索することを想像すると頭が痛くなりそうだ。
そのとき———

俺はふと人の気配を感じ、上を見上げる。

「はぁっ！」

そこには音もたてずに俺に向かって踵を振り下ろす男の姿があった。

「ちっ」

俺はバックステップでその一撃をかわすと、男を観察する。
黒の長髪と知的な相貌。
肉体は引き締まりながらも、バネのようなしなやかさを併せ持っている。
さらに、特筆すべきは男の雰囲気である。まるで武道の達人のような静謐な空気を合わせ持っている。

「驚きました」

男は全然驚いてなさそうに呟く。

「どこの賊かと思えば、噂の勇者様ではありませんか。我が主のお屋敷に何か御用ですか？」

「何たいしたことじゃない。正義の味方である俺が悪に裁きをくだしにきただけだ」

「それはそれは…しかし、些か無礼ではありませんか？一言お伝えくだされば十分なお持て成しもできましたのに」

「はっ、悪に無礼も糞もあるか。お前らは膝まずいて首を差し出せばいいんだよ」

「まったく、伝承で伝え聞く勇者様とはまったく違いますね」

「人間誰しも違うもんさ」

男は「ごもっとも」と苦笑する。

「お帰りをご期待することはできませんか？」

「生憎とそんな気はさらさらないな」

「では…仕方がありませんね」

男が何かの武道の型お構える。

「私はお嬢様に忠誠を誓った身。たとえ勇者様であろうとも手加減はいたしません」

「安心しな。そのお嬢様はお前が死んだ後で俺が可愛がってやるよ」

「ふふふ、お嬢様に男女交際はまだ早いでよのでお断りします」

空気が急速に冷え、お互いに睨みあう。

それは数秒であったかもしれないし、一分をとっくに超えたかもしれない。
やがて時が満ちる。

「夢幻衝流ーーーアルガッド・シルベルスター参ります」

それは一瞬の出来事であった。
俺は瞬きをした次の瞬間、男の拳が目の前であった。風を切り重力を突き破るその一撃はまるで弾丸である。
俺はそれをほとんど本能と反射神経だけで避け、魔力を込めた拳で男の顎を狙う。
しかし、同じようにかわされてしまう。
深追いは危険と判断し、俺は一度男から距離をとった。

「まさかあれを避けられるとは…さすがと言っておきましょう」
「ふんっ」

あいつの余裕が気に入らない。
この世界に来てから身体能力は飛躍的の向上している。しかし、その上をあの男は言っている。気に入ｒらない。そして、おもしろい。
俺とまともに勝負できる奴なんていつぶりだろうか。戦闘を楽しみたい興奮とあの男を壊したい欲求が鬩ぎ合う。

「しかし、次で終わりです」
「……」

男が再び電光石火の早さで俺に接近する。
十全に溜められた拳を俺は避けることなくそのまま鳩尾に受け入れた。

ドンッ！
まるで銃声のような音が響く。
俺の口から真っ赤な鮮血が零れた。

「ゴポッ」
「なっ！」

男が驚愕の表情を浮かべる。
その糞生意気な顔に向けて俺は全力で拳を叩きこんだ。

ゴキャッ！

顔の骨を砕く感触。
男の顔を歪に歪ませながら、俺は腕を振りぬいた。

「なかなか効いた。お前の拳」
「……」

全身を痙攣させながらも、なんとか意識を保っている男に俺は近づく。

「でも残念ながら俺には勝てないな。じゃ死ね」

足に魔力を込め、男の顔を踏みつぶさんと振り上げる。

そこへ――

「おやめなさい！！」

そんな高貴さに満ちた声が響いた…。

勇者と忠誠（後書き）

最後までお読み頂ただきありがとうございます。
ご意見・ご感想なんかあれば、もらえると嬉しいです。
ではまたお会いしましょう！

フローラ

その声に振り向くと、そこには一人の女がいた。
柔らかなウェーブのある銀髪をたなびかせ、俺の視線に怯むことなく傲然と見返してくるその視線には俺といえども感嘆を禁じえない。
年齢的には俺と同じくらいか…高い魔術的素養を持っているのか、その周囲には吹き荒れるような魔力が停滞しており、女を守っている。

――ほう、中々いい女じゃないか…。

精巧な人形を思わせる相貌だけでなく、纏っている『強い者』の雰囲気も俺好みである。
間違いなく、この女は俺の目的の人物だ。俺は理屈でないところでそう確信した。
しかし、納得いかない事が一つだけある。
これほどの女が父親の仕業とはいえ、周囲からの汚名をみすみす見逃すだろうか？
この女ならば、実の父親でさえその手で縊り殺してもおかしくはないはずである。

「初めまして、俺は安達棗。お前の名は？」
「ご挨拶が遅れて申し訳ありません。わたくしの名はフローラ・エル・ジャルバーンですわ勇者様」

そう言いながら着ている水色のドレスの裾をつまんで軽く礼をする。
その様は実に様になっていて、彼女の美しさを引き立て育ちの良さを感じさせた。

「ところで勇者様。わたくしの従者の命、見逃していただけませんか？」

それは言葉通りのお願いではなかった。
俺が断れば即座に俺を攻撃するだろうことが魔力の流れと女の力強い瞳から感じられる。

「条件がある」

俺はそのフローラの態度に言葉にできない歓喜を覚え、しかし気取られないように冷静に言葉を紡ぐ。

「お聞きしましょう」
「お前を抱きたい」

まどろっこしいのは嫌いなので、俺は本心を口にする。それほどの俺はフローラに惹かれていたのだ。無論、それは恋愛などという甘いものではないのだが…。

「いいですわ」
「お嬢様！！」

問いの答えも簡潔だった。
アルガッドはまともに動かない身体でもがきながら、泡をくって叫ぶ。

「貴方は黙っていなさい」
「くっ」

しかし、それはフローラに届くものではなく、アルガッドは悔しげ

に唇を噛んだ。

「ですが、こちらからも一つだけ条件があります」

「そんな事が言える立場か？」

俺はアルガッドの頭に乗せた足に力を込める。ほんのわずかだったが、それだけでアルガッドは苦しげに呻く。どうやら身体能力の向上は俺の想像以上だったようだ。

「受け入れてくださらないのであれば、わたくしはここで舌を噛み切りますわ」

「……」

舌を噛み切るというのは、言葉で言うほどに簡単なことではない。とてつもない苦痛と恐怖が伴うある意味でとても残酷な死にかただ。しかし――

フローラならばやるだろう。

一切の迷いも躊躇もなく。

「……いいだろう言ってみろ」

「お父様を助けていただけませんか？」

「……何？」

「お父様を――」

「それはもういい。分からないのは何から助けるか…だ。むしろお前の親父から助けてもらいたい人間の方が多いんじゃないか？」

「それは違います」

「違う？」

ええ、とフローラは頷く。

そして俺はある予感を抱く。

何かが始まる予感。
止まっていた歯車が回りだすような――

「お父様の汚名を晴らしたいのです」
「汚名？汚名というが、お前の親父が横領を――」
「それは違います！！」

フローラが声を荒げて否定する。
その形相は般若のように歪められ、瞳が憎悪に満ちていた。

「なぜなら――」

落ち着きと取り戻したフローラは俺の目をしっかりと見据え、決定
低な言葉を口にした。

「お父様はもうすでに亡くなっているのですから…」
「はっ？」

それによって俺にしてはめずらしく頭が真っ白になってしまったの
だった……。

惨劇と復讐

私――フローラ・エル・ジャルバーン――はその日、地獄を見た。
あの時の光景はいまでも――いえ、いつまでも私の脳裏で何度も何度も蘇り、この精神を苛む。

――叫びたい。

――泣きたい。

――喚きたい。

――甘えたい。

――救いたい。

――助けて…誰か助けて…。

しかし、私を助けてくれるものなど一人もいはしないのだ。いつだって私を助けてくれた人はもういない。
何故なら、その人は私の見ている前で奪われてしまったのだから。
永遠に失ってしまったのだから…。

私は今、地獄を見ている。
愛していたお父様。
そのお父様がただの血肉に変わり果ててしまう光景を私は見てしまったのだから……。

私はその日、いつど通りだった。
いつもの時間に目を覚まし、湯浴みをし、歯を磨き、髪に櫛を通し、アルガッドの知らせで朝食をとるために食堂に向かい、お父様と朝の挨拶をかわし、談笑しながらの朝食。

「ではお父様、行ってまいりますわ」
「ああ、気をつけてな。アルガットも頼んだぞ」
「御意にございます」

お父様の優しい笑顔に見送られて家を出る。
親愛なるお父様。お母様は数年前に病魔に侵されて亡くなってしまったけど、私は幸せだった。二人に見守られていた。

学園に向かうための馬車の中でも、私はいつもと変わらぬ毎日を信じて疑わなかった。

私が異変を感じたのは、授業を終え、家に帰った時だ。

「今、戻りまし――」

帰宅を告げようとすると、私の唇にアルガットが人差し指を差し出す。
何事かと振り返ろうとするより先にアルガットが口を開いた。

「何者かがいるようです」

私の背中に冷汗が流れる。アルガッドは攻撃魔法は使えないがその職業上、対侵入者用に探査魔法においてはこの国で右に出るもののない使い手だ。

そのアルガッドが侵入者がいることを告げていた。これは間違いない。

「ど、どこにいますの？」

嫌な予感が渦巻く。私の中で警鐘がけたたましく鳴り響いている。

「……」
「アル…ガット…？」
「旦那様の…お部屋です…」
「ッ！！」
「お嬢様！？」

私は駆け出した。
魔法で身体能力を上げ、風魔法で足音を殺す。
お父様…お父様…お父様！！
お父様の書斎まで来ると、多数の話し声が聞こえる。
私はほんの少しだけ冷静さと恐怖を思い出し、とりあえず、書斎のドアをほんの少しだけ開けてみる。

そうよ…ね。お父様はご友人と談笑されているだけよ。私ったら慌ててみっともないわ。

そう自分に言い聞かせながら、ドアの向こうの光景を見る。
そこには――

「――い――」

悲鳴を上げようとする私の口が暖かい手で覆われる。
誰かは分かっていた。

「お嬢様！！」

声なき悲鳴を上げ茫然としている私を抱きしめる腕。
涙が溢れた。
私はアルガッドの胸に顔をうずめながら泣いた。
しかし消えないあの光景。

手足を切り取られ、目をくり抜かれ、床に散らばっていたには白いお父様の歯。最後に奪われたであろう首から上は絶望と恐怖に歪んだ人とは思えぬ表情。血にまみれ、この世のすべてを呪わんとする呻きが今にも聞こえてきそうだった。
その部屋には数人の男がいて、その誰もに共通していたのは、鋭く尖った耳。その耳を持つのはエルフか魔族のどちらかである。しかし、エルフは女しかいないため、必然的にその男達は魔族だということが分かった。

助けて――助けてください――誰かお父様を！！

私を強く抱きしめながらアルガットは強く室内を睨みつける。
まるで、何者をも見逃さんとするその顔に私は何も言うことができない。悲しく、辛いのは私だけではない。アルガットも幼少時にお父様に拾われ、私とは兄弟のように育てられたのだ。

私はアルガットを強く、強く抱きしめかえす。

しばらくした後、私はアルガットに連れられ、一旦外に出た。そこで私は胃の中にあるものをすべて吐いてしまった。

「アルガット…」

「はい、お嬢様」

私はえずきながらも言葉を吐き出し。
アルガットはまるで私が何を言うか理解しているかのように目を閉じ頷く。

「あの連中は許しません」
「……」

しかし、私たちでどうにかできる連中ではない。お父様は私よりも高位の魔術師であり、アルガットにとっての体術の師でもある。そのお父様がどうにもできなかった連中に今はむかった所でみすみす殺されるだけだ。

「まずは様子をみましょう」
「御意に…」

必ず…必ずお父様の敵を！！
私は胸に誓った。

惨劇と復讐（後書き）

ご意見・ご感想いただければ嬉しいです。

契約には対価を

「ふむ」

おおまかな話を聞きながら、俺はアルガッドに入れさせた紅茶を飲みながらため息を吐く。
フローラは唇を強く噛み締めながら瞳を潤ませていた。
だんだんと面倒になってきていた俺だが、とりあえず気になっていたことを尋ねることにした。

「今生きているジャルバーンは誰なんだ？」

そう。
これだ。
汚職で話題になっているジャルバーンとは一体誰なのか？

それを聞くと、フローラとアルガッドの表情が苦虫を噛み潰したように歪む。

「二年前…私とアルガッドが一旦屋敷に戻った時のことです。お父様…いえ、お父様の姿を騙る魔族が私達を当たり前のように出迎えたのです」
「しかし、我々には対抗する術がなく、何も気づかないふりをして今日に至るというわけでございます」
「へぇ」

それは純粋にすごいと思う。
なにせ、相手は父親を殺した憎き魔族だ。
そんな相手と二年もの間共に過ごしてきたなど正気の沙汰とは思え

なかった。
――それほどまでに憎かったのか、もしくは…父親と同じ姿に幻影を見ていたか…。
「勇者様」
「ん？」
「先ほどのお願い…聞いて頂けないでしょうか？」
フローラがすがるような目で俺を見る。
「それはお前の父親を騙っている魔族を殺してほしい…ということか？」
「はい」
強い決意。
もうここで終わらせようとする目だ。
「ふむ」
俺はこの女が気に入っていた。
何事にも屈しない強い女というのは非常に珍しいのだ。
だから、条件次第では手を貸してやるのもやぶさかではない。
「条件覚えてるか？」
「…は…い」
消え入るような声で頷くフローラ。
やはり、力いっぱい頷けるようなことではないのだろう。
なにより、ここで嬉しそうに頷かれると俺が萎えてしまうに違いな

い。
俺は嫌がる相手を無理矢理に押さえつけてヤるというのも好きなのだ！

「じゃあとりあえず服を脱げ」
「え！？」

弾かれたように俺を見るフローラ。
目は信じられない、とでもいいたげに見開かれている。

「こ、ここで…ですか？」
「何か問題でも？」
「……ぃぇ」
「だったら早くしろ」
「……はぃ」

震える手で服に手をかけるフローラ。
そこで俺は振り返り、部屋かで出ようとするアルガッドを呼びとめた。
手を爪が食い込む程強く握り、顔には一つの感情が浮かび上がっている。

嫉妬である。
ああ、なるほど…と俺はあることに気づく。
俺は好奇心に身を任せて声をかける。

「どこへ行く？」
「私は…お邪魔のようですので？」
「何を言っている？お前はここにいろ」
「は？」

「聞こえなかったか？お前はお嬢様の護衛なんだろ？だったら俺がフローラに危害を加えないように見張ってないとな？」
「貴様っ！？」
「棗様と呼べ。塵が」

俺に殺気を向けるアルガッドを無視して俺はフローラに再び振り返る。
フローラは青い顔で震える手を身に纏うドレスにかけている。
俺の笑顔があまりに美しすぎたのか、目が合うとビクンと身体が硬直する。
どうやら俺に対して怯えているようだった。何故かは分からないが。
だって考えてもみてくれ？
こいつと俺は初対面だ。
その相手に殺しを依頼したのである。それなりの報酬を頂くのは至極当然のことだろう？
で、あるならばだ。
今から起こることは当然で仕方のないことなのだ。
うん。そうに決まってる。

「どうした？早くしろ」
「あ…ああ…」

フローラは絶望に染め上げた顔を隠すように項垂れ、服を脱ぎ始めたのだった。

――一週間後。

「～～～♪」

俺は機嫌がいいのを隠しもせずに、鼻歌交じりに町を歩く。
一週間だ。それだけの時間をかけて、ようやく最後の仕上げが終わった。
仕事をいうのは、もちろんフローラに依頼された件である。
しかし、いくらなんでも表向きは筆頭貴族であるジャルバーンを真正面からぶち殺すのはさすがにまずい。
そう思い、今日までエルフィーナにも手伝わせて準備をしてきたのだ。
それがようやく終わった。
しかし、ちょっと名残惜しかったがね…。ククク。

そんな俺が向かっているのは、王宮の大会議室である。
どうしてそんな所に向かっているかというと、これからそこで会合を行うことになっている。
そこには、王女と勇者権限でジャルバーンを始め、癒着に携わっている人間を集めた。

――さて、これから大がかりな塵掃除といきますか。

契約には対価を（後書き）

ご意見・ご感想くださいませ。

罪と罰と俺様　前篇

ジャルバーンを始めとする横領疑惑のある貴族達は戸惑っていた。
昨日の夜、王族権限で急に集まることを命じられたのだ。
始めはなんだろうか？と軽く考えていたが、この部屋に入った瞬間、悪寒を感じた。
それもそうだろう。
何故なら、そこにいるのは見慣れた顔ばかりなのだから…。

「ジャンバール様…。これは一体どうなってるんでしょうか？」
「我にも分からん…」

顔を青くして寄ってくる子爵の男をジャルバーンは冷たく突き放す。

「しかし…」
「黙っておれ！！」
「……」

その声は大きく、男だけでなく、周囲でざわめいていた貴族達も黙った。
皆が皆、ジャルバーンに自信なさげに、しかし非難めいた視線を浴びせかける。

――――どうしてこんなことに…。

ジャルバーン以外の貴族は誰もがそう思った。

くそ！くそ！くそ！
表向きは動揺してない風を装っていたが、ジャルバーンは焦っていた。
ジャルバーン家という筆頭貴族の家を乗っ取り、子爵や男爵などの下級貴族のほとんどを金で囲って利益を上げてきた。
いずれは伯爵、侯爵家を操り、国をまるごと乗っ取る算段であった。
策とも呼べぬ力任せで強引な手法だが、この国の王は日和見主義で実力行使ができない事を見越した考えでもあった。
そして、予想道理、横領が発覚しても国王はジャルバーンを断罪しなかった。――否、できなかった。
それほどにジャルバーンが取り込んだ貴族は多かったのである。
すべてを罪に問えば国として破綻してしまう程に…。
シリベスタ王国は極めて危うい均衡のうえにある。
だというのにこの問答無用の招集。
これまでの王の正確からは考えられない行動だった。

「…一体誰が…」

しかし、その答えはすぐに知れることになる。

ガチャという音と共にドアの向こう側から現れたのは、エルフィーナ王女。
しかし、いつものようなおどおどとした様子ではなく、どこか毅然とした雰囲気を纏っている。
貴族達もエルフィーナ王女の変わりように驚いている。
そして、その後に続いて現れた人物に会議室が一層ざわめいた。

「あれは…」
「勇者様？」
「確か…棗様と申されましたか」
彼から勇者様と呼ぶ棗だった。
「チッ」
ジャルバーンは舌うち一つ。
「あいつか…」
と、忌々しげに棗を睨みつけるのであった。

今日の俺はご機嫌である。
最近は俺の趣味を思う存分に満喫できたからだ。
しかし、その最後の仕上げが残っている。
これこそがメインイベントだ。
さてさて、では派手にやるかね…。

俺は不安げな顔で俺とエルフィーナの方を見ている貴族達に向かって不敵な笑みを浮かべてみせる。

お前達のことならなんでも知っているぞ、と言わんばかりに。
その顔を貴族達は直視できずに、誰もが視線を俺から逃がす。

「さてエルフィーナ、打ち合わせ道理にな」
「お任せを、棗様」

エルフィーナは俺の言葉に優雅に頷いてみせる。
その表情には今までになかった自信がありありと浮かんでいた。
これも俺と行動を共にしていた影響だろうか？
まぁいい。
俺は強い女は大好きだからな。

「では貴族の皆さま。これより王族会議を始めます。ご着席ください」

エルフィーナはそう促すと、自身も棗の隣に腰掛ける。
棗とエルフィーナを上座に、ジャルバーン、続いて伯爵、侯爵、男爵、子爵という並びだ。
ちなみに、王族会議とは王族が主として話を進める会議のことで、貴族の場合は貴族会議となる。
そして、この会議で決定したものはたとえどんな事であろうとも覆らないと決められているのだ。

「では、ジャルバーン卿にお聞きしたいことがあるのですがよろしいですか？」
「…何なりと」

ジャルバーンはエルフィーナの迫力におされながら頷く。

「横領事件はありましたか？」

ざわざわと会議室がざわめく。

「黙れ」

しかし、棗が低い声で言うと、途端に静まり返る。

「どうなんですか？ありましたか？」

「い、いえ…ありません」

ジャルバーンとしては頷く訳にもいかない。
ここでの発言は覆らないのだから。
頷いてしまえば最後、処断されることになる。
しかし、彼には勝算があった。
ここにいる貴族達の影響力は小さくはないし、様々な弱みをジャルバーンは握っている。
ここでシャルバーンが処断されて困るのはむしろ皇族の方だ。
何故なら、シャルバーンが死、あるいは囚われるようなことがあれば、貴族達は自分たちにとってなにがなんでも隠しておきたいことを暴露してしまうという呪いがかけられているのだ。
人間には他人を操るだけの魔術はそうそう扱えないが、魔族であるジャルバーンにとっては至極簡単なことだった。

「ふぅー」

しかし、ここには通常の人間の測りでは扱えぬ存在がいた。

「これじゃあいつまでたっても平行線だな。俺はこんな茶番は早く終わらせたいんだ」

笑みを浮かべながら俺は――――

「なっ！？」

突然の事態に驚愕するジャルバーン。

「き、貴様！」

「棗様と呼べ」

ジャルバーンの首筋に剣を突き付けた。

「もう一度聞かせてもらえるか？お前は横領したか、してないのか。よく考えてから返答した方がいいぞ。俺はあまり剣の扱いには慣れてないからな」

――――美しい顔を悪魔のように歪めながら問うた。

罪と罰と俺様　中編

「……」

ジャルバーンは自分の首元に突き付けられた刀を睨み、次いで棗に視線を向ける。
無言…だが言いたいことは良くわかった。
「こんな事をしてどうなるか分かっているのか？」そう言いたいのだろう。
無言が言葉よりも雄弁に語りかけている。

「くくく…」

それに対して俺は肩を震わせて笑ってしまう。
魔族という種族がどこまでも馬鹿で愚かで滑稽だということは分かった今、笑わないのはむしろ失礼というものだろう。
このジャルバーンを騙る魔族はいつまで自分の方が優位だと思っているつもりだ？
剣を突き付けられて尚、自身満々な態度…数分後を予想するだけで憐憫すら生ぬるい。

「何がおかしい？」

魔族は不快げに顔を歪めながらも、微塵も揺らがない。

「お前があまりにも馬鹿だからだ」

だからおしえてやろう。
お前に。

自分がいかに無知で馬鹿で憐れな犬畜生にも劣る劣等生物だと言うことを…。
俺様は直々に赤ん坊でも理解できるようにお前に粉みじんにまで噛み砕いて説明してやろうではないか。

「――――！」
「まぁ、まて」

俺は怒気を膨らます短期な魔族に射るような視線を投げかける。
もちろん、その視線には憐憫の情も多分に含まれていたが、それはまぁ置いておこう。

「お前は本当に横領をしていないのか？」
「も、もちろんです。天地神明に誓ってありえません」

怒りを押し込め、慌てて弁明する魔族。
あと、その発言はギャグか何かだろうか？

「では、お前らにも聞く」

成り行きを傍観していた貴族達を見まわし、再び問う。

「横領はしていないのか？」

その言葉に貴族達はおずおずといった感じで頷いた。

「ふむ…しかしおかしいな…。横領事件があったのは事実だ。では誰がやったんだろうな？」
「正確には分かりませんが…おそらくはグラウディウス卿がやったのではないですかねぇ？最近はいろいろと困っているようですから

ね…」

魔族はそう厭らしい笑みを浮かべて答える。
グラウディウスとは、国王派の伯爵位をもつ大貴族である。
数年前までは卓越した先見眼による投資、政治手腕によって莫大な財をなしたが、血縁にあたる貴族が没落寸前になり多額の融資をしたが、努力空しく没落。
それと連動するように妻が亡くなり、それが原因か何をしても上手くいかなくなっているらしい。
しかし、その人の良さから多くの民や国王派の貴族に慕われている人格者でもある。
たとえお金に困ったからといって横領を働くとは思えない…とエルフィーナは言っていた。
まぁ、グラウディウスの人格はどうあれ、フローラらの証言によってジャルバーンが犯人であることは疑いようのない事実だろう。

「ふむ…」

先の言った通り、俺はまどろっこしいのが大の苦手である。
なんでもズバリ！簡潔に！を至上に生きている。
俺は魔族をちらりと見る。
相も変わらず、不愉快な笑みを浮かべている。

さて、ここで一つの問題だ。
こいつがどうしてこんなにも自信満々なのか？
その答えは極めて簡潔。
奴の協力する貴族連中の数が圧倒的に多いこと。
それは金であり、弱みで築いた砂上の楼閣ではあるが、今、この瞬

間においてはそれは上手く機能していると言えるだろう。
その証として、魔族を裏切ろうとする貴族がいないことだ。
すべての貴族を処断してしまうと、これも先の述べたように国か立ち行かなくなる。
魔族に従う貴族は質こそ低いが数が多い。
質より量！とでも言いたげに貴族全体の半数を占めている。
これは明らかに国王にも責任はあるが、とりあえずその問題は置いておく。
なによりもフローラとの契約があるしな。

そして、結論。
こいつ一人を処断するには、こいつに付き従う貴族達の裏切りが必須である。
多くの貴族による後ろ盾がなくなれば、筆頭貴族といえども、処断は免れない。
逆に言えば、貴族達の裏切りがなければ、魔族を処断することは極めて難しいと言わざる負えない。
何故なら、無理に魔族を処断しようとすれば、貴族達による妨害が起こることは目に見えているのだから。
それはフローラ達から得た情報により明らかだ。

――――「呪い」。

これこそが魔族の切り札だ。

それを覆す策はただ一つにして単純明快。
今握られている弱み以上の弱みを握ること。
単純ゆえに困難。
普通ならば実現は不可能である。

そう――――普通ならば…な。

別に小賢しい策を弄した訳ではない。
いつも通りの力技。
さぁ、お前達はどんな反応を見せてくれるのかな？
俺は合図を示すように指をパチンと一度鳴らすのだった……。

その瞬間、会議室のドアがギィと音を立てながらゆっくりと開いた。

「誰だ！今は会議中だぞ！ぶ――――れ…いな……」

ノックもなしに会議中のドアを開いたことに憤慨した男が注意しようと前に出るが、語尾になるにつれその表情は青く頬を引き攣り出す。
不審に思った他の貴族達が無礼な侵入者を見ようと身を乗り出すが誰もが似たような反応を示した。

無理もない。
ざわめきは最高潮を迎えていた。
「お父様…」
無礼な訪問者は苦渋に満ちた表情で男達の前に立つ少女たち。
彼女たちは皆、貴族達の娘であった。
貴族の娘だけあって、どの娘も上等に仕立てられて衣服を纏い、それに釣り合うだけの気品と美貌を備えている。
だが、一つだけ違う所があった。
――――首輪。
それはこの国では奴隷を示すもの。
数年前に奴隷制度は廃止されたが、それが今だ根強く残っていることを貴族達は知っている。
「エリーシャ…何を…？」
一人の貴族が娘に事情を問いかけるがエリーシャと呼ばれた少女は父親であるはずの貴族を見ようともせずに、真っ直ぐに俺の元へ向かってくる。
そして、少女たちは俺の真正面まで来ると忠誠を誓うように跪いた。
「「「――――な！？」」」
その時、貴族達の心中は同じだったことだろう。
魔族でさえ、この様子を茫然と見ているだけだ。
そう、これが俺が一週間の準備の成果。

貴族達の最も大切であろう人物を手中に収めること。
俺に娘たちの様々な視線がぶつけられる。
崇拝、狂信、奴属、羨望、愛情、憎悪、怒り、哀願。
恍惚としたものから殺意を全面に押し出す者まで。
この視線からも分かるように皆が皆、従順に俺に協力した訳ではない。
しかし、人の心を折ることなど俺からしてみれば容易いことだ。
婚約者、恋人を人質にとり、それでも従わぬ者も、愛する者の目の前で犯してやれば、どんなに心に強い者でもすぐに俺に許しを請う。
うん、我ながら完璧な仕事である。

「……」
「はっ」
「――――っ！？」

先ほどから俺に強烈な殺気を浴びせている女を一瞥し、あざ笑う。
憎悪？
結構ではないか。
俺を殺したい？
上等だ。
つまり、何が言いたいかと言うと――――
――――やれるもんならやってみな！
あっははははははははははははははははは！！
嗜虐心を存分に満たした所で最後の仕上げだ。
「さて、貴族諸君？お前らはどっちの味方だい？」
その一言に貴族達がびくりと身を震わせる。

鈍感でどうしようもなく馬鹿なこいつらにも、ようやく状況が分かったようだ。

「この娘達はさ、お前らのやってきた事に心底心を痛めている。そこで救いを求めて自主的に俺の元へやってきたんだ」

もちろん嘘だ。

「そこで頼まれた。お前らを助けてくれ…とな。なぁ？お前らの敵は一体誰だ？俺か？違うだろ？」

高圧的な態度から一転。
優しげな天使微笑で問いかける。
雨と鞭。
見事である。
彼らが国を裏切ってまで魔族に協力していたのは一重に家族のためだ。
それがどれほど罪深く、愚かな行為と分かっていても手を染めてしまう。
守るために。
そうまでして守ろうとしていた家族を握られた今、彼らは何を思うのだろうか？

「あそこにいるジャルバーンだよな？」

全員の視線が一斉に魔族に向く。
顔色を次々と変え、動揺を隠しきれない魔族に……。

罪と罰と俺様　中編（後書き）

前後篇で終わらせるつもりが長くなりました。
次は戦闘描写も予定しております。

ご意見・ご感想、どしどしお待ちしております！

罪と罰と俺様　後篇

皆、沈黙。
誰一人として口を開こうとはせず、会議室は静寂で満ちていた。
しかし、そんな中でも、状況は刻一刻と変化を遂げている。

――――目だ。

違うのだ。
悲しいほどに…。

恐怖と諦観によってしめられていた貴族達のその視線。
ジャルバーンを見るそれが憎悪の炎へと変わっている。

彼らは国を思っていない訳ではなかった。
それはそうだ。
生まれてから何十年をここで暮らしてきたのだろう。
祖国ヴェゼーラを嫌えるはずがない。
ここで生まれ、何者かを愛し、そして新たな命の生まれた場所だ。
国王は賢王だったし、それなりに豊かである。
一体どうすれば嫌えるだろう。

しかし、彼らは裏切った。
仕方のないこと…とは言わない。
だが、生粋の貴族である伯爵家ならさておき、男爵、子爵の彼らに国のために家族を捨てろというのはあまりにも酷だ。。
ゆえに、手を汚した。
より大事なものを守るために。
なにより、ジャバールへの恩もあった。

彼らが困った時、手を差し伸べてくれるのはいつもジャバールだったのだから…。

――――でも。

それも、今日、終わらそう。
この瞬間、貴族達の心は一つになった。
償おうと…貴族としての誇りを取り戻そうと…。
彼らは、反旗を翻す。

ツカツカと背筋をピンと伸ばした男がジャバールの前に歩み出る。
その瞳には生気が宿り、どこか毅然とした雰囲気を纏っていた。

「ジャバール様…。あなたは変わってしまわれた。しかし、それをわたしは憎んではいません。小さい罪を隠すために大きな罪を犯す愚行をしたわたしが弱かったのです」

――――と、ジャバールに一礼し、彼は言った。

「我が名はフランツ・フォン・エルガー。我が息子は禁忌とされている『セレフの聖薬』を口にしました。このフランツどんな罰でも謹んで受ける所存です！！」

自らの罪を告白した。

「はは」

俺は笑みを零し――――

「勇者の名において許す！」

そう宣言した。

罪を告白した貴族が唖然としているが、今はこの勢いの乗じることが最優先だ。

「ほら次！」

せかすように声をかけると、貴族達は慌てたように自らの罪を告白していく。

その内容の中には、不貞――――ヴェゼーラにおいて不貞行為は重罪とされている――――やこの件とは別の横領など、俺からすればひどく小さな罪ばかりである。

圧力があったとはいえ、よくもまぁ、こんなことのために大きな罪を犯したものだ。また、別件の横領とはいっても、金貨を数枚――――俺の国でいうところの数十万円――――程度だという。

金額が小さいから許されるという訳ではないがこの三年間で魔族の懐に入った金貨が推定三千枚という話だから文字通り桁が違う。

知られたくないことや、罪の意識や重さは人それぞれだとは思うが、それにしても呆れるほかない。

ちなみに、横領をしていた貴族達にはそれぞれ役割分担があり、小さい罪からだんだんと慣らしていくシステムがあったそうだ。

――――閑話休題。

俺は罪の度合いによっては事前に国王と話し合って決めていた妥当な罰をあたえ――――人殺しなどの場合――――ほとんどの貴族は無実となった。

「ふ、ふざけるな！！」

「あ？」

突然、魔族が泡を食ったように騒ぎだす。

まだ観念してないのか？あいつは…。

「なに騒いでる？うるさいんだけど？」

「こっちの台詞だ！な、なんなのださっきから！？こいつらは罪を犯してるんだぞ？！」

「だから許すって言ってるだろ？耳鼻科行け」

「じ、じび…？そ、そんなことよりも！許すで済まされる訳がないだろうが！？」

「済まされるさ」

「な、なな何を…」

「だってこれは王族会議だぞ？ここでの発言は覆らない。よって馬鹿貴族共の罪も覆らないが、俺の許しも覆らない。まぁ、そういうことだ」

まぁ、この王族会議が誰かの恩赦のために使用された記録はないらしい。

基本的にここは自白なりなんなりして罪を認めている罪人の最後の懺悔と判決を言い渡す場となることがほとんどだ。

「そんな…馬鹿な事が…」

ショックからか痙攣をしている魔族に向けて、俺はついでのように判決を言い渡す。

「ちなみにお前は有罪ね。今すぐ死刑だから」

こうなればもう自白も必要ない。

証人は大勢いるし、決定的な証拠もこいつを死刑にした後でゆっくりと探せばいい。事実、その証拠とやらを先ほど自白した貴族の中に一人が持っているらしいという報告を受けている。

さて、後は…。

俺はフローラとの契約を思い出す。

確か、魔族を殺すことと本物のジャバールの名誉を取り戻すこと。

魔族とやらは以外と気が長い。

俺の予想では誰かが罪を告白しだした時点で馬脚を現すと思ってたが。

「くく…くくく…くくくくく」

うむ。

どうやら始まったようだ。

「あはははははっはははあはｈがはははははｈｇｓｈｄｈｊｆ！！」

何やら語尾の方は人語では解せない。
しかし、追いつめられた悪役の高笑いというのはどこの世界でもお約束なんだな。
そんなどうでもいいことを考えつつ魔族を見る。
中年にしては細身の身体が筋肉で盛り上がり、手足が不自然なほどに肥大する。

「エル」

その様子を見つつエルフィーナに声をかける。
すると、エルフィーナはすべて分かっていますとばかりに頷き、わけの分からぬジャルバーンの変容とその身から溢れる威圧感で悲鳴も上げれず硬直している貴族とその娘たちを外へと誘導していく。

「あっ」

そう言えば大切な事忘れてた。

「おいお前ら」

と出て行こうとしている連中に声をかける。
そして、その振り返ったそいつらに俺はお得意の天使の微笑を投げかける。

「俺の事、許せよ」

連中は恐怖と動揺と緊張からか小刻みに首を縦を振りながら返事をした。

「よし！とっとと行け！」

王族会議で起こったことは覆らない。
なんて素晴らしいルールだろうか。
これで俺がしてきた反感や憎悪をかわれて然るべき――――自覚はあった――――の無茶苦茶な行いも許されたわけだ。

「あとはお前を殺すだけだ！」

低い唸り声を上げる魔族に俺は不敵に微笑みかけた。

「うがぁ！！」
「ほい」

理性の吹き飛んだ様子の魔族。
その力任せの拳を引き寄せるようにして受け流す。
いくら肉体が強化されたとはいえ、それにも限界がある。
こんな岩でも砕きそうな拳を真正面から受け止めるほど俺は被虐趣味ではないのだ。

「おいおい、ちょっと落ち着けよ」
「がばぁ！！」

俺の言葉に耳を貸す様子もない。
繰り返されるのは単調な直線的な攻撃。

「おおら！」
顔を狙って放たれた空気を切り裂く拳。
その勢いを利用して、魔族を一本背負いの要領で投げ飛ばす。
――――ガララララ。
会議室内の机や椅子を豪快に巻き込みながら転がる魔族。
しかし、やはりというべきか、その身には傷を負った様子も見られず瞬時に立ちあがった。
「ん？」
だが、先程までのように突っ込んではこない。
一撃入れられたことで冷静になったのか、滾る様な殺意はそのままに俺を油断なく睨みつける。
「……貴様ぁ…勇者…！」
憎悪に濡れた声色。
「なんだ喋れるのか」
「当たり前だ。わたしは魔族。人間などという劣等種と同じにするな！」
威嚇するように咆哮し、右足をやや前に出す。
そのまま獲物を狙う獣のように重心を低くし全身に力が込められる。
「劣等も優越も関係ない。強い方が正しいんだぜ？そんなに自分の

優越を証明したいなら俺を殺してからにしな」
「ふん！言われるまでもないわ！」
魔族は言葉と同時に突っ込んでくる。
その速さはさっきまでとは比べ物にならない程だ。
だが――――
「反応できない程じゃない！」
「がああああ！」
大きく開けた口。
巨大な牙を剥きだし、涎を滴らせながら俺の血肉を貪らんと首筋に食らいついてくる。
その牙を紙一重で交わしながら、無防備になった顔に渾身の回し蹴りを叩きこむ。
「はぁ！！」
「あああ！」
――――ガキン。
まるで金属同士がぶつかったような音を立てながら交差する牙と足。
それは蹴りの威力と牙の強度を雄弁に語っていた。
「ちっ」
舌うち一つ。
蹴りの反動で俺は魔族から一旦距離をとる。
「やるじゃねぇか」

「このくらいは当然だ。お前は温いな勇者とはこの程度か？」
「まさか」
俺は傲慢に笑いながら首を振る。
すると、魔族はその分厚い筋肉に覆われた巨大な肉体を震わせて笑いだす。
「くくく…よかろう。我が名はエリゼグス」
「あん？」
「名乗れ。戦の作法も知らんか？」
「これから死ぬ奴に名乗った所で時間の無駄だ」
「…違いない」
会話の最中も互いに一瞬の油断もない。
視線は絶えず動き、相手の隙を虎視眈々と窺っている。

息の詰まりそうな緊張感の中、先に動いたのは魔族――――エリゼクス。
雷のような不規則な動きで俺を翻弄する。
「ん？」
ふと、俺はある事に気がつく。
エリゼクスの通り道には、残像と何か…。
なにか…エリゼクスの身体が淡く発光しているような――――
「これで終わりだ」

瞬間。
その低く、重い声が耳元で聞こえてきた。
「なっ！？」
エリゼクスが纏う光が段違いに輝く。
俺の視界を焼くように圧倒的な光芒が俺を包む。
――――俺はこの光の正体に思い当たり、焦る。
この光、この熱量！
「ちょ！？てめ待て――――」
俺の声より早く、会議室を轟音と閃光が支配した。

「く…あく…くそ！？」
痛む身体を引きずるようにして、俺は風穴と炎渦巻く会議室から外へと脱出する。
出たのは城の中庭。
いつもはメイドや庭師などが忙しなく行きかうこの場所に、今は人影一つ見えない。
聞こえるのは俺の息遣いと中庭の中央にある噴水の音、それと――
――

「……」

もう一人の――――俺を待ち構え、悠然と立っているエリゼクスの息遣いだけ。

「何故だ？」

「…？」

「何故魔術を使わない？確か貴様は強大な魔力を有していると聞いたが？」

エリゼクスは心底不思議そうに問う。

今の俺は隙だらけだというのに…。

「うるせぇ…てめぇには、そんなもん使う必要がないだけだ…」

苦しい言い訳だ。

戦闘経験の差か俺は追いつめられている。…ほんの少しだけ…。

しかし、魔術は使えない。

いかに強大な魔力を有しているとはいえ、魔術に関しては素人だ。

力任せならともかく、細かな制御などはまだ扱えない。

確かに、魔術を――――ここに召喚された時に使用した魔術を使えば、エリゼクスを葬れるかもしれない。

だが、それではエリゼクスを肉片一つ残らず消し去ってしまうかもしれない。

それではだめだ。

フローラとの契約――――ジャルバーンの汚名を晴らすことができない。

まだ、殺せない…。

「お前がジャルバーンを殺したのか？」
「なんだ？今更」
「答えろ」
「黙れ、劣等」

俺を見下ろしながら、エリゼクスは新たな閃光を纏いながら俺の腹部を蹴り上げる。

「ぐふっ！？」

強烈な衝撃に取り込んだ口から酸素と共に、血を噴き出す。

「げほげほ…は――――ぐあああ！？」

呼吸を収まらない内に、今度は背中から全体重を込めて踏まれた。

「くくく…苦しいか？そういえばジャルバーンも貴様と似たような表情をしていたなぁ」
「何？」

心底、愉快そうにエリゼクスは続ける。
その表情は本当に醜悪で。恐らくはこれこそがエリゼクスの本当の顔なのだろう。

「あいつ娘だけは助けてくれと、わたしに泣いて懇願するのだ。助ける訳がないだろう馬鹿が！あはははははは！」
「どういう…意味だ？」
「ジャルバーンを殺した後、あの馬鹿娘と従者はのこのこと家に帰ってきよった。だから犯した、三日三晩犯しぬいてやったわ！！」
「なん…だと？しかし…」

「記憶がないか？そんなもの消したに決まっておるだろうが！処女だと思っている奴を従者の前で犯しては記憶を消し、何度も何度も…。本当は穢れにまみれている女が穢さないでと懇願する様は実に滑稽であったわ！！」

ああ、そうかよ。

「淫乱の雌豚めが！どうせわたしの事をお前に知らせたのはあの娘であろう？貴様を殺した暁には、あの娘を再び犯し、ジャルバーンと同じように殺してやるわ！」

そう言いながら、最後の止めを刺すため、足を振り上げるエリゼクス。

そして、そのまま、一段と強い雷を纏った足を振り下ろす。

――――ドゴン！

威力のあまり、地面が抉れ、土煙が舞い上がる。

「なんだと？」

しかし、その足元、潰され憐れな死体となっているはずの者はどこにもいなかった。

逆に――――

「ぎゃあああああ！」

猛烈な勢いで脇腹の衝突してきた何かにエリゼクスは吹き飛ばされる。

巨体を地面に擦りながら、ようやく十メートル先でその身体は止ま

る。

「ぐ…ぐぅ…」

なんとか立ち上がるが、一本背負いで傷つかなかった身体が見るからに傷ついている。
衝突を受けた脇腹が焦げて炭化していたのだ。

「ぎ、貴様ぁ！！」

叫ぶ声にも力がない。
どうやら立っているたけでも辛いようで足元はふらふらと揺れていた。

「エルフィーナ守備などうだ？」
「ご心配なく。完璧です」
「そうか、良くやった」
「あ、あの…」
「分かってる。今晩はご褒美だ」
「は、はい！！」

苦痛と憎悪に眩んだ視界の先に俺は立っていた。
雷光を纏いながら…。

「こんな感じか？」

俺は頼りなく揺れているエリゼクスに雷速で近づき、無防備な顔面に向かって軽く拳を繰り出す。
軽く出せれたはずのそれは、音速の壁をいとも容易く蹂躙し、いつ殴られたのかエリゼクスに認識できない早さで顔面を打ち抜いた。

それだけで、脇腹を同じようにエリゼクスの右顔面は黒く炭化し、ボロボロと皮膚が崩れる。

「ぎゃあああああああああああああああああああああ！！」

絶叫するエリゼクス。

「何故…何故だぁ！！わたしは貴様を圧倒していたはずなのに！！」

「黙れ三下」

俺は伊達や酔狂で殴られていたわけではない。

こいつから、自身がジャルバーンを殺したという言質を得るためにやられるふりをしただけだ。

プライドの高いこいつのことだ。

少し油断させればすぐにボロボロと勝手に喋り出すことは目に見えていた。

そして、ここから離れた所で様子を見ているエルフィーナにこの戦闘の様子を魔術を使って貴族や市民に見せているという訳だ。

誤算だったのはフローラの記憶が消されているという事。

この様子をフローラも見ているなら、そのショックは計り知れないだろう…。

「ま、関係ないか」

そこまで面倒は見られない。

あいつが立ち直れるかどうかはあの執事しだいだろう。

「さてと…そろそろお休みの時間だぜ？」

俺はこいつの使っていた魔術を真似した雷を消し、闇を顕現させる。

どこまでも暗く、どこまでも深い、奈落の底を体現したような直径一メートル程の球体状の闇。

「こ、こんな所で、こんな所で死んでたまるか！わたしはあいつを超え――――」

闇に恐怖したのか、先んじて捕えようとしたのか、再び雷を纏ったエリゼクスは俺に突っ込み、そして消えた。
あまりにあっけない。
俺自身、驚いてしまった。
エリゼクスの身体の一部に闇が触れた途端、それに吸い込まれたのだ。
まるでブラックホール。
すべてを無に帰す破壊の権化。
纏っていた雷光さえもかき消された。

「まったく…」

呆れのため息が漏れる。

「これから、どうなんのかねぇ…」

その声色は面倒くさそうだったが、エルフィーナ曰く、その時の俺はこの世の絶頂を迎えたかのような笑顔だったという…。

罪と罰と俺様　後篇（後書き）

更新遅くなって申し訳ないです。
競馬で五万円負けて放心状態でした（笑）。
小説の方はこれにて一章が終わりですね。
次の間章が一つ入って第二章となります。
最後まで読んでいただき本当にありがとうございました。
ご意見・ご感想あれば、どしどしください！お願いします！

間章～とある魔王の災難～

とある場所。
異世界の中でもそこはさらに隔絶された場所。
そこに一人の少女の姿があった。
輝くさらさらの金髪に金の瞳。
おっとりしたような童顔で可愛さと美しさの狭間のいるような絶世の美少女だ。
その寝顔は安らかであり、見る者すべてを癒してしまいそうな安らかさに満ち溢れている。
これはそんな少女のお話である…。

ここは…どこ？
私が目を覚ますと、そこは見覚えのない場所であった。
全体的に暗く、明りはほとんどないと言ってもいい。
どこかの室内であることは分かるが、それ以上のことは何も分からない。
もしかしたら、誘拐…されたのかもしれない。
ブルッ。
身体が震える。

恐怖によって。
両手で身体をかき抱くように、力を込める。

記憶はあった。
学校が終わり、塾の帰り。
昨今増えている性犯罪者対策のために街頭の増えている公園。
家への近道のそこを通った記憶。

そこで途切れていた。
家についた記憶は…ない。

「あの…」
「ひっ！」

突然、背後から聞こえてきた聞きなれない声。
それに驚き、震えは激しさを増す。
しかし、なんとか私は相手の顔を確認しようと、振り返り――――
激しい後悔に襲われた。

「うぁ…な、ない…」

悲鳴も出ない。
そんな余裕はなかった。
わたしにあったのは、脳を焼き切らんばかりの恐怖。

振り返った先にいたのは人間ではなかった。
化け物。
そんな単語が頭に浮かぶ。
普段、人を傷つけるような差別をしないよう心がけ、できる限り庇うようにしてきた。

そんな自分の行為が欺瞞だと思い知らされる。
そんなものは余裕のある人間の特権だと。
私は自分の醜さに恐怖する。
だって思ってしまったのだ。
醜悪だと…。
瞳に映る存在に対して。

簡潔に述べれば、それはこの世界でゴブリンと呼ばれる魔族。
人間並みの知性のあるゴブリンは魔物ではなく、魔族と位置付けられている。
身体は小さく、筋肉質。
全身が緑色で、目は鋭く吊りあがっている。
乱暴そうでありながら、どこか知性を感じさせる佇まい。

「あああ…な、なに？なんなのぉ…？」

目から涙が溢れ、口から放たれる言葉はあまりにもよわよわしい。
そんな私の様子を見てか、焦った様子のゴブリンは慌てて自分の無害を証明しようと試みる。

「あ、安心してくだせぇ！あっしらは、貴方様に危害を加えることはありませんぜぇ！」

そのあまりの必死さに、私は思わず気が抜けてしまうが、もちろん恐怖がなくなった訳ではない。
見知らぬ場所で見知らぬ人間にそんな事を言われても、安心などできようはずもない。
ただ、今すぐどうこうされる――――殺されたりする訳ではないようだという事実に安堵の吐息が漏れる。
そもそも、選択の余地などないのだ。

どういう状況にしろ、ここが見知らぬ場所である以上、私が情報を得るには目の前の…彼に聞くしかないのだから。

「こ、ここは？」

「は、ここで魔王城です。まぁ、魔族の総本山ですね」

「ま、魔王？魔族？」

訳の分からない単語ばかりで混乱する。

しかし、ここが現実離れした世界であることは認めなければならないようだった。

それは目の前の彼が体現している。

人ではない存在。

彼の言葉を借りるのであれば、魔族という種族。

少し前に読んだファンタジー物の小説が思い浮かんだ。

まさか…と言い切れない自分が悔しい。

「なんで私がそんな場所に？」

「それは…」

ゴブリンは何を今更というような表情で言った。

「あなたが魔王様だからでっせ！」

「はっ？」

その瞬間、私――――片瀬里奈の日常が砕け散った。

「はぁ…」

私のために用意された豪奢な私室。
金が惜しみなく使用された贅沢極まりなく、かつ趣味の悪い私室で
私は深くため息をついていた。
私がここに――――魔王城に召喚されてから一週間。
月日は怒涛のごとく過ぎ去った。
彼らによると私は魔王らしい。
人間たちが勇者を召喚するのに合わせて、魔族も魔王に相応しい人
間を召喚する。
それは魔族の間で遥か昔から繰り返されてきた事。
あれから私は魔族の幹部との顔合わせをし――――なせか一様に驚
きの表情を浮かべていた――――今日、ようやく自由な時間を得ら
れたという訳だ。
まったく…最悪だ。
魔王なんて冗談じゃないわ。
勇者に合わせて、魔王を召喚する。
なんかそれって…まるで――――

――――魔王は勇者に倒される生贄のような気がしてならない。

そう想像すると恐怖が止まらなかった。
夜、ベットの中に入ると、枕を何度も涙で濡らした。

「帰りたいよぉ…！」

また涙が溢れる。
死にたくない！
死にたいはずがなかった！

友達と遊んで、好きな男の子と付き合って、結婚して、子供を産んで、おばあちゃんとおじいちゃんになって、そんな平凡な人生でよかったのだ。
こんな世界は望んでいない。

「棗くん…」

脳裏に浮かんだのは一人のクラスメート。
顔は女の子みたいなのに、自信家でちょっと危険な男の子。
私の初恋の人。
今でも好きだ。
すごく好きだ。
会いたい。
会いたかった。

「ううぅ…ひっ…うああ」

零れる涙。
涙…。

誰も助けてくれない。
魔族の人たちは私のことを気にかけてくれているけれど、どこか余所余所しく、そいてやっぱり怖いのだ。
心安らぐ場所がなく、胸に次々と溜まる不安。

「たすけてぇ…」

その声は誰にも届かない。

間章～とある魔王の災難～（後書き）

この物語の一応のメインヒロイン（笑）の登場です。
これからもたまに登場するので、里奈の苦難もお楽しみくださいませ！

勇者といえば冒険

魔族のジャルバーン為り替わり事件から一週間。
罪を犯した貴族達とその他の大貴族、王族が手を取り合い、尽力した結果ヴェゼーラが以前よりも強固な結束を得、国民の混乱もようやく落ち着いてきた。
無論、まだ裏でわだかまりもあるだろう。
しかし、それは彼らが乗り越えるべきことで俺としては得に興味はない。

フローラは当初、事件を黙認していたと責任を追及されていた。
フローラ自身も父の汚名返上ができたおかげで甘んじて罰を受け入れようとしていたが、俺が貴族共に事情を話してやると、国王の命によりフローラが家督を継ぐことになり、他の大貴族からの支援も受けながら目下奮闘中だ。
支援が受けられるのは、フローラの才覚とジャルバーンの人徳のなせる技だろう。

国王に関しても、今回の件を重大に受け止め、精進すると家臣たちに頭を下げていた――――ので一発殴っておいた。
王が頭を下げてはだめだ。
王は王という生きものであって人間であってはならないというのが俺の考えだから。
王に間違いは許されない。
王は間違いを認めてはならない。
そのぐらいの覚悟がなければ王になどならないほうがいい。
とりあえず国王には俺の思想を押しつけておいたので、少しくらいはましになる――――ような気がする。
まぁ、どうでもいいか……。

「めんどくせぇ…」

そんな訳で俺はだいぶん暖かくなってきた日差しの下ヴェゼーラをひどく懐かしんでいた。
身に纏うのはこの世界の貴族がよく愛用するという品のある刺繍の施された服と黒のローブ。
学生服は目立つということで仕立ててもらったのだ。

「あ、あと少しですから我慢してください棗様！」

隣には動きやすさと可愛さを同居させた――――ワンピースのような――――服を着た第一王女エルフィーナ。
俺達二人は護衛もなく、ただひたすらに続く道を歩いていた。

それは二日前、唐突に告げられた。

「魔族の情報を集めてほしい」

国王は夕食時、対面に座る俺とエルフィーナにそう告げた。

「は？」
「各国を回って魔族の情報を集めてほしいのだ」

俺は一瞬考え――――

「断る！」

――――即刻、決断した。

だって面倒だし…。

「ふむ」

しかし、その答えを予想していたのか、国王は怯まない。

「棗殿は美しい女性に目がないとか」

「ま…嫌いじゃないな」

ただ好きなのかと聞かれると答えに困るが、嫌いではない。

「世界を旅すればこの国ではお目にかかれない美女もたくさんいるぞ？それに棗殿の興味を引くような様々な文化がある。どうも棗殿は退屈を嫌う傾向にると思うのだが…どうかな？」

さすがは賢王と囁かれるだけのことはある。

俺の性格を見抜いている。

「お父様」

そこにエルフィーナが口を挟んでくる。

「なにかね？」

「私は棗様について行ってもよろしいんですよね？」

「もちろんだ。それが召喚の巫女の役割でもある」
「そうですか。…よかった」

ホッ、と安堵の息を零すエルフィーナ。

「それにしてもエルフィーナよ。お前は棗殿が他の女性と仲良くするのを黙って見ていてよいのか？」

国王は冗談交じりに問いかける。
それに応じるエルフィーナは満面の笑み。

「もちろんですわ。私は棗様をお慕いするのみです。捨てられない限り、私は棗様のすべてを肯定します」
「そ、そうか」

気圧されたように頷く国王。
エルフィーナは変わった――――否、俺が変えたと言うべきか。
始めの気弱さはなりを潜め、今ではすっかり女王らしくなった。
そしてなにより、俺を狂信している。
それがいいことなのか悪いことなのか今はまだ分からないが、しばらく放っておこう。

それよりも今は今後の事だ。
この世界を回ってみる。
非常に興味を刺激されるが、リスクもある。
エルフィーナは王女で旅に出た際の危険は計り知れない。
だが、ここにいても俺の目的を達成できないこともまた事実。
この世界にある魔法。
それならば――――俺の願いを叶えることができるかもしれない。

「おい、国王。旅に出てやってもいい」
「ほう。本当かね？」
「ああ。エルフィーナもそれでいいな？」
「勿論ですわ。棗様」
「では出立は二日後。それまでに用意はこちらで済ませておこう」
「分かった」

確かに俺は旅の用意を任せた。
だが、何故歩きなんだよ！
馬車とかあんだろうが！
まったく、日焼け止めもないのに焼けたりしたらどうするんだ。
ここら辺は得に安全だからといって護衛の一人もないのも問題があ
りすぎる。
俺達が向かっている目的地に護衛役は一人待っているそうなのだが
…。

「エルフィーナ。目的地まであとどれくらいだ？」
「そうですね…あと二時間といった所でしょうか？」

効いた途端、脱力した。

「まじかよ…」

光り輝く朝日の中、俺は目的地の村で絶対馬車を用意させようと心
に堅く誓った。

勇者といえば冒険（後書き）

少し遅くなってしまい申し訳ありません！

ご意見・ご感想どしどしお待ちしてますので、よろしくお願いします！！

2P　新たな村と護衛と冒険者ギルド

「着きましたわ。ここがヴェゼーラ王都に最も近い村。エンゼル村です」
「やっとか…」

重いため息。
五時間の歩きの果て、俺はようやく最初の目的地に到着していた。
たった五時間。
言葉にするとなんでもないように聞こえるが、実際何の変化もない道をただひたすらに歩くのはとてつもない苦痛だ。
どうやら俺は、旅人なんかには向いてないようだ。

「ここは…誰でも入れるのか？」

軽く眺めてみても、門などが一切見当たらない。
あるのはなんの変哲もない木製の簡易な柵で村を囲っているだけで、門番の姿さえ見えなかった。
誰でも自由に出入りができそうだが、それはあまりに危険ではないだろうか？

「ここら周辺は特に治安がいいんです。それに対策をしていない訳ではないんです。あちらに――――」
「ふざけてんのか！？ゴラ！！」

と、エルフィーナが視線を向けた方向から、いかにもなやられ役を彷彿とさせる怒声が聞こえてくる。
何事かと興味本位で見てみると、そこには見るからにいかついヤクザのような風貌の男が嫌がっている少女の腕を掴んでいる様子が見

て取れた。
少女はどこか村娘を彷彿とさせる素朴で清楚な誰もが好感を抱きそうな容姿をしている。

「ぶつかっといて何の謝罪もなしか？！あっ？」
「ご、ごめん…なさい」

明らかに怯えた声で必死に頭を下げる少女。
全身は震え、いまにも気絶してしまいそうだ。

「言葉だけで許されると思ってんのか！？本当に悪いと思ってんなら誠意見せるんが筋だろうが！」
「せ、誠意…？」
「その身体で払えっちゅうことや」
「――――っ！？」

ビクンと身体を震わせ、男に懇願の視線を送る少女。
しかし、男はそんな少女の様子に加虐心をさらに刺激されたようで、少女の腕を握る手に力を込める。

「う…ああ」
「どうするんや？」
「…いやぁ」

耐えかねたように少女の目元から涙が溢れだす。

「……」

俺はその成り行きを見守りながら一つの疑問があった。
住民の反応である。

普通、これだけの騒ぎとなれば、かなりの注目を浴びることになるはずなのに――――

住民たちはその様子を遠巻きに見守っているだけ。

冷静に――――だ。

――――まるで、こんなにはいつものこと。慣れたことであると。

無関心でも、巻き込まれるのを恐れているのとも違う。

そう。

これから何が起こるのかを知っていて、安心しきっているかのような――――

バタン！！

ふいに男と少女の背後にあった大きな店――――剣と楯を模した看板が出ている――――から一人の青年が現れた。

金髪碧眼。

どちらかといえば中性的で十人中十人が美形と答えるであろう整った顔の造形。

鍛えていることが一目で分かる肉体は力強さとしなやかさを併せ持ち、おおよそ完璧ともいえる。

その青年は、絵画や彫像といった芸実的な容姿をしている。

「……」

青年は無言のまま男に近づくと、有無を言わせる間もなく少女を掴んでいた手を捻りあげた。

「ぐぅえええええ！」
無様な声を上げる男を尻目に青年は少女に優しく笑いかける。
「大丈夫ですよ。すぐに終わります」
「…はい」
そんな青年をボーと見つめる少女の頬は少し赤くなっていた。

青年は捻りあげていた手を離し、男を少女から遠ざけると、その正面に向かい合う。
「女性に乱暴は関心しませんね」
「だ、誰がてめぇは！？お、俺に何の用だ！？」

さっきまでの威勢の良さはどこへやら。
男は声を発するがさっきまでの力はまるで感じられない。
むしろ、焦りと恐れを強く感じさせられる声だ。
「これは失礼を。私はヴェゼーラ王国騎士団長のエリスキーと申します」
青年は優雅に一礼する。
エルフィーナと同じく、一つ一つの仕草から育ちの良さを感じる。
そして――――
「騎士団長！？」

その高貴な騎士団長様と向かい合う男は驚愕を隠そうともしない。
最近は王やら王女やら何かと高貴な生まれの人間との付き合いが多いためか俺自身、失念していたが騎士団長とは相当な大物だ。
なにせ、ヴェゼーラの軍の総司令のような立場なのだ。
男が動揺するのも無理はないだろう。

「ば、馬鹿な…なんでこんな所に…こんな大物が…」

放心したように呟く男。
意外すぎる人物の介入で状況を理解しきれていない。

「ところで、何故貴方は彼女に乱暴を？」

青年の目が厳しく光る。
男は慌てたように弁解を始めた。

「そ、それはその女が俺にぶつかってきて…」
「それは別に故意ではないでしょう？」
「それは…そうだが」
「謝罪はされましたか？」

青年は少女に問いかけると少女はぶんぶんと首を縦に振る。
よしよしと少女の頭を撫でた後、男に再び向き直る。

「あなたの言いがかりではないですか…。少なくとも、乱暴はやりすぎです」
「……」

沈黙する男。
しかし、俺は男がポケットをまさぐっているのを見逃さなかった。

「――――どいつもこいつも」
「……？」
「――――どいつもこいつも軍人はうぜぇんだよ！！」

獲り出したナイフで青年に飛びかかる男。
しかし、それは衝動的とはいえ、あまりに無謀な行為を言わざる負えない。

あきらかな素人の動きで放たれる凶刃を青年は紙一重で避け――――

「――――はああ！」

その勢いを利用し、投げ飛ばす。
その一連の動作はあまりにもなめらかであり、もしかしたら男は何をされたかも理解できていないかもしれない。
ズザザザザと地面を転がる男。
その意識は完全に断たれていた。

「……」

パチパチパチ。

始めは一人から。
しかし、それは波のように広がり、最後には周囲全員の広まる。

パチパチパチ。

青年はその拍手に照れたような表情を浮かべ、何度も頭を下げる少女の頭を軽く一撫でしたあと、男を衛兵――――この村では軍人ではなく、警察のようなもの――――に引き渡して店内に戻った。

「どうでしたか？」

様子を憮然と眺めていた俺に声がかかる。

「何が？」
「彼…ですよ」
「エリスキーとかいう男か？」
「ええ。棗様なら気づいていらっしゃるのでは？」
「…ああいう男…苦手なんだよな」

ああいう正義感の強い男とは致命的に合わないのだ、俺は…。

チャリン。

渋っていた俺だが、エルフィーナに促され嫌々ながら店内に入る。

「ほぉ」

武器屋か何かだと思っていた店内は清潔に整えられ、食事処や宿まで完備してあり、何よりも活気があった。
生き生きとした男や女が酒を飲み交わし、雑談に興じている。
ここは――――

「冒険者ギルドです。ヴェゼーラ最大のギルドなんですよ」

世界屈指の冒険者ギルドであるここ『獣の友』はエンゼル村の三分の一の敷地を誇る巨大ギルドだ。
世界各国から人が集まり、日々の交友が絶えない。
また、『獣の友』では宿や料理の値段設定を他店よりも三割程落として提供している。
そのかわり、なにかしらの有事の際には冒険者ギルド所属の者が手を貸すというのが暗黙の了解になっているそうだ。
世界中から猛者の集まるこの村を襲う酔狂な奴などそうそういないので、ここらの治安はすこぶる安定している。
ギルド所属の人間にしても、仕事を多く貰うには信用が第一と理解しているので、問題を起こす者などほとんどいない。
いるのは低級の魔獣ぐらいでこの喧騒を度外視すれば平和なものらしい。

それにしても――――

「あいつどこいったんだ？」

探している人物――――エリスキーの姿が見当たらない。
まぁ、俺としてはこのまま見当たらないほうが都合がいいが。

「棗様。受付の方のお話ですと、どうやらエリスキーは宿の部屋の戻ったそうですわ。訪ねてみましょう」

どうやらそういう訳にもいかないようだ。
俺はエルフィーナに先導され、エリスキーの泊っている部屋に向かう。

別段、問題もなくエリスキーの部屋の前に辿り着く。
騎士団長とはいえ、泊っているのはごく普通の部屋のようだ。
コンコンとエルフィーナが部屋のドアをノックすると、すぐに「はい」と返事が返ってきた。

「どちらさまですか？」

さすがは騎士団長というべきか、若干の警戒を示しながら僅かに開いたドアの隙間からこちらを確認する。
その瞳がエルフィーナを捉えると、僅かに目を見開きそして柔らかな笑み。

すぐにドアを開き俺達を部屋に招き入れ、即座にエルフィーナに騎士の礼をとる。

「お久しぶりです。エルフィーナ皇女殿下」
「ええ、本当に…。元気にしてましたか？」
「はい、もちろんです。私がこうしていられるのもすべてはヴェゼーラ王国…エルフィーナ皇女殿下のおかげです」

エリスキーは恭しく頭を垂れながら口上を述べ、エルフィーナの手の甲に口づけをする。
それはまるで何かの儀式のようであった。
そして、その見立ては正しかったのだろう。
エルフィーナが笑みを浮かべるとエリスキーも肩の力を抜き、若干フランクな口調になった。

「エルフィーナ様…ご成長なさいましたね」
「ええ、それもすべては棗様のおかげですわ」
「ああ、そういえば…」

エリスキーは俺にようやく視線を向け、問いかける。

「こちらの美しいご婦人はどちら様でしょうか？」
「……」
「……」
「…？どうかなされましたか？」

不思議そうにするエリスキー。
俺もこういう事態には慣れているので、別に怒りはない。
とはいえ、いつまでたっても話が進まないので口を開く。

「俺は男だ。お前も聞いてるんじゃないのか？なんせエルフィーナの護衛役なんだから」
「はっ…」
エリスキーの目が点になる。
ものすごい美形だけのその表情はとてもシュールだ。
「えっと…ではあなたが勇者の棗様ですか？」
「ああ」
エリスキーの顔が何か言葉では形容できないように歪み――――
ガバッと頭を下げた。
土下座でもするように。
「ご、ご無礼をお許しください！騎士団長という責任ある立場にありながらこの失態！どんな処分でも甘んじて受ける次第です！」
なら死ね――――そう言いたかったが、どうにか自制する。
俺はこれから各国を巡る旅に出る。
しかし旅の友がエルフィーナだけというのは少し心もとない。
俺は他国のことなど知らないし――――本で軽く流し見た程度――――エルフィーナにしても箱入りな面があるから心許ない。
だったら、腕が立ち、他国のことをよく知っているであろうエリスキーは非常に役立つ人材だ。
何より俺は別に気にしていない。
「別にいい。気にしてない」
「しかし――――」
「いい…と言った。二度も言わせるな」

「…御意に」

エリスキーは軽く息を吐いた後、場の空気をかえるように告げる。

「申し遅れました、棗様。私の名はエリスキーと申します。ヴェゼーラ王国にて騎士団長という大任を任されております」

「俺は安達棗。いちおう勇者をやってる。で、お前が今回の旅に同行するエルフィーナの護衛役だな？」

「はっ！その通りでございます」

「…その堅苦しい喋り方をやめろ。息が詰まる」

「申し訳――――分かりました、棗様。これでいいですか？」

俺は無言で頷く。

どうやら最初の印象よりも、柔軟性のある人物のようだ。

少なくとも、どうしようもない堅物ではない。

「それにしても――――」

「あん？」

「噂には聞いていましたがどう見ても男には見えませんね。そこいらの貴族令嬢なんか目じゃないですよ」

「……」

度胸もあるな…天然か？

エルフィーナも苦笑いだ。

俺じゃなかったら間違いなく激怒するだろう。

まぁ、それはいい。

俺は不敵な笑顔を意識して傲慢に告げる。

「エリスキー。これからの旅、俺とエルフィーナを命がけで守って死ね」

そのあまりにもな命令にエリスキーも笑みを返しながら再び今度は俺に対して騎士の礼をとる。

「私エリスキー・ウォン・ノーエンスのすべてをエルフィーナ様と棗様の捧げる所存であります！しかし！」

エリスキーは俺の目を真っ向から見て言い放った。

「私は死にません！エルフィーナ様と棗様をお守りし、私も生き残ります！」

どこまでも自信に満ちた声音。

それは――――あの人に似ていて――――俺は――――

笑った。

どうやら少しは楽しい旅になりそうだ。

そんな予感がしたのだった…。

2P　新たな村と護衛と冒険者ギルド（後書き）

最後まで読んでくれてありがとうございます。
今回から第二章となります。

ご意見・ご感想ありましたら、是非お願いします！！

ギルド依頼

エリスキーとの顔合わせを終えた俺達は、身体を休めるために自室に戻った。
身分を隠しているため、それほど豪華な部屋ではなく、エリスキーとほぼ同じ部屋だ。
聞けば、大きなギルドともなると、王族や貴族などが寝泊まりするためのＶＩＰルームすらあるという。
それだけで、この世界でのギルドという組織の巨大さと民にとっても必要とされていることが分かる。

「棗…様ぁ…」

俺がベッドに寝込がりながらそんな事を考えていると、耳元でそんな猫なで声が聞こえてくる。
考えるまでもない。
この部屋には俺の他にはもう一人しかいない。

「…何だ？俺はもう眠い」

欠伸をしながら答え、エルフィーナに向けてしっしと手を振る。

「そんなぁ…。棗様、私もう我慢できないです…！」

エルフィーナはすっかり淫乱になってしまっていた。
人前では別人のように毅然としているが、俺と二人きりの時、特に夜は毎日のように俺を求めてくる。
俺としても嫌な訳ではないがこう毎日では身が持たない。
何より――――

まぁ、それはいい。

「そんなに我慢できないなら服を脱いで外にいけ。お前ならいくらでも買い手がいるだろ」

「そ、そんなの嫌です！」

「だったら我慢しな」

出来の悪いペットには躾が必要だ。

ペットはペットらしく主人が餌を与えるまで従順にしっぽを振って待っていればいいのだ。

「俺は寝るぞ」

もう眠いのだ。

元々運動は嫌いなのに――――できない訳ではない――――今日は何十キロも歩いた。

肉体的には平気でも、精神的な疲労は溜まっている。

「ああん！棗様っ！？」

そんなエルフィーナの悲痛な声をＢＧＭに俺は眠りについた。

翌日。
昨日は寝る時間が早かったためか、日の出とともに俺は目を覚ました。
久しぶりに深い眠りにつけたのか、俺にしては寝起きスッキリで気分がいい。

「すぅ…すぅ…」

隣には安心しきった顔で眠るエルフィーナ。
俺はエルフィーナの指通りのいい髪をしばらく撫でた後、起き上がりシャワーを浴びる。
風呂好きの俺としては、風呂やシャワーがあるのは大変喜ばしいことだ。
この世界の風呂は水系統魔術と錬金術の組み合わせらしいのだが、それについてはここでは伏せておく。
また、その他にも、この世界と俺の世界には様々な共通点がある。

たとえば、食べ物がその代表格だ。
名前こそ違うが、俺の世界にあった食べ物、調味料、調理法は俺にとってよく見知り、食べなれたものばかりである。

そのおかげで俺もこの世界に早くなれることができたと言っても過言ではない。

そうこうしている内にシャワーを終え、着替え終わると、エルフィーナを叩き起こす。

「おい！起きろ！」

そう言いながらシーツを引っ張ると「きゃあ」と悲鳴を上げながらエルフィーナはベッドの上がら転がり落ちる。

「おら！とっとと着換えろ！おいてくぞ」

「…ふぇ――――――は、はい！」

眠気でポニャンとした顔に理性が宿り、慌ててエルフィーナは着替えを始める。

――――俺の目の前で…。

その些かの躊躇もなく服を脱ぎ捨てる様子に俺は教育を間違えたか？と自問している内にエルフィーナは着替え終わったようだ。

今は櫛で急いで長い髪を梳いている。

たいくつ凌ぎに俺はふと思いついた疑問を投げかける。

「お前は化粧とかはしないのか？」

「はい。私にはまだ必要ないので！」

笑顔でそんな答えが返ってきた。

世の淑女が聞いたら激怒しそうだ。

結局、エルフィーナの準備が終わる頃には、それからさらに二十分の時間を要した。

ギルドは朝早くから活気がある。
その大半は朝食をとるために集まっているのだが、例外もあった。

「これなんかどうだ？」
「え～でも、なんか大変そうじゃない～？」
「…大変じゃない仕事…ない…」

一枚の紙きれを眺めながら、あーでもないこーでもないと議論している三人の男女。
二十歳過ぎくらいだろうか？
そんな三人が眺めている紙切れ…。
その前には巨大な掲示板がある、そこには同じ紙が何枚も貼りだされている。

「おい、あれは？」

俺はエルフィーナに問いかける。

「はい。あれはですね。ギルドの依頼書ですね」
「なるほど…。あの中から仕事を選ぶわけだな…」

あの紙には仕事の内容が書いてあるのだろう。
興味を引かれた俺は早速その内容を確かめてみることにした。

「ふむふむ…」

紙の一番上にはＳ～Ｇまでの難易度が書かれており、Ｓが一番難し

く、Gに近くなるほど簡単な仕事内容らしい。
この掲示板にもSランクの依頼が一つある。

『龍種の討伐以来』

この依頼はどうやら国から発行されているらしく、依頼主の欄には、ワキナ共和国とあった。

「龍って強いのか？」
「強いなんてもんじゃありません。龍種は一体で国を滅ぼせる力を持っています。しかし、知性が高いため無闇に人間を襲うなんてことはそうそうありません」
「でも討伐依頼ってことは…」
「ええ…絶対襲わないわけではないですからね…。事実、数十年に一度の頻度で龍種の被害は出ています」

エルフィーナも、龍が恐ろしいのか、微かに肩を震わせている。
龍…か。
見てみたいな。
それに…龍がいれば移動が楽になるんじゃないか？
馬車のかわりになりそうだ。

そんな罰あたりかつ、こちらの世界の人間からすれば自殺行為に等しいことを考え、俺はそのSランクの依頼書を手に取った。
その瞬間――――ギルド内が凍りついたように静まり返る。
理由は察することができた俺だが、そんなことはいにかえさず、依頼書を受付に渡した。

「ギ、ギルドカードはお持ちですか？」

どこか焦ったように言う受付の女。

「ギルドカード？」

そう俺が疑問を呈すると受付もあれ？というような微妙な表情を浮かべる。

沈黙する俺にエルフィーナが小声で告げる。

「ギルドカードというのはギルドが発行する身分証明書のようなものです。また、依頼は最低でも一つ上のランク――――つまり、SランクならAランクのギルドカードを持っていないと受けることはできません」

「…ふむ」

ちなみに、ギルドカードは誰であろうとも例外はなく、最初はGランクから。

エルフィーナも持ってはいるがFランクという話だ。

困った。

実に困った。

だが、俺は龍を是が非でも見てみたい。

そしてペットにしたい。

そんな俺に救いの声がかかるのは至極当然の事だった。

「おはようございます。棗様。エルフィーナ様。――――どうかしましたか？」

エリスキー。

騎士団長をしている俺の下僕。

「お前ギルドカードは？」
「もちろん持ってます」
「ランクは？」
「一応Ａランクを…」
「よし…」

完璧だ。

その後、龍種の討伐と聞いてショックのあまり昏倒しそうになるエリスキーに無理矢理依頼を受けさせることに成功した。
さぁ、待ってろよ！龍！

ギルド依頼（後書き）

ご意見・ご感想どしどしお待ちしてます！！
感想頂ければ、作者のやる気が大幅にアップするので、どうぞご協力ください！

ワキナ共和国へ

装備を整え、万全の準備が完了した。
エリスキーやエルフィーナは出発が決まった日から青い顔をしているが、旅に出てみれば気分も変わるだろう。
歩いていくのは変わらないが、気分は上々。
気持のいい日差しの下、人に仇名す龍退治。

お母様…お父様…俺は今日も元気です――――

そんな訳で旅立ちの日。
俺達が龍の討伐に出ることは一夜で町中の噂になっており、ギルド内では知らぬものなど一人もいないというような状況だ。
そして、どこで聞きつけたのか俺達がいざ町を出ようとすると、町の入口にはずらりと町人やギルド所属の人間が並んでいた。

「…なんだこれは」

さすがに圧倒される。
どこにこんなにいたのやら、見渡す限り人、人、人。
そして、その誰もが悲しげな視線を俺達に向けているではないか。

「龍の討伐というのはギルドの人間や騎士に限らず、あらゆる人の夢でもあるんです。しかし、現実では歴史上、龍を討伐できた人間

はまだ数える程しかいないんです。そんな理由もありまして、龍の討伐に出る者を勇者として送り出す決まりがあるんですよ」

後ろからのエリスキーの囁きになるほどと俺は納得した。
そして、こいつらの悲壮な顔の意味も。
これは死地へ向かう人間に投げかける視線だ。
俺達が死ぬのだとこいつらは決めつけている。
まったもって失礼な話だ。
送り出すなら笑顔でしろ。
たとえ、九分九里死ぬであろうとしても…だ。
俺達は勇者なんだろ？
死ぬために戦いに行く奴なんていないだろうに…。

「この国の連中は悲観的な所がダメだな…」
「仕方ありませんよ…。私も騎士団長などと大層な肩書を持ってはいますがその実震えが止まらないんです。龍を討伐しに行くと聞かされた時から怖くて仕方がない…」

それは騎士にあるまじき発言だろうが、ここにそれを咎める人間はいない。

「はぁ…」

俺はため息をつき、エリスキーと緊張で一言もで言葉を発しないエルフィーナに向き直る。

「そんなに怖いならここに残ったらどうだ？」
「そ、それは…できません。私も騎士です。棗様に誓った忠誠を覆す気はありません！」
「……」

エリスキーは言葉で、エルフィーナは俺の服の裾をぎゅっと握ることで意思を示す。
弱く、脆いが、それは戦う意思だ。

「だったら俺についてこい」

その褒美に――――

「お前らに龍殺しの栄誉をくれてやる」

なんたって俺は――――

「勇者をなめるな」

そう高らかに宣言し、俺達は村を旅立った。

旅に出て早一時間。
俺達はピンチに陥っていた。

「暇だ…」

出発前の高揚感などなにもなく、そこにあるのは退屈だけ。

「暇すぎる…」

ぶっちゃけると俺はもう飽きてきていた。
龍は見てみたい気持ちは今も変わらない。
ただ――――

俺達はヴェゼーラとワキナ共和国を繋ぐ街道を旅しているわけだが、ここからワキナ共和国の首都までは１０日間。ワキナ共和国の国境を超えるまで町や村はなく、そこまで7日かかるのだという。
つまり、最低7日はひたすら歩いて野宿。

――――甘く見ていた…。

その場の勢いでなんて面倒な選択をしてしまったんだ…。
かといって、依頼は受けたい。
龍はロマンだ。

俺は今、そんな悲痛な板ばさみにあっているのだ。

「棗様？どうかなさいましたか？」
「いや…」

エルフィーナの問いかけに歯切れ悪く答える。
さすがに本音を口にするのは憚かれる。

あれもこれもそれもどれも龍のせいだ！
俺はこの苛立ちを龍にぶつけることを誓った。

「なぁ、龍ってどんな姿してるんだ？」
あまりにも暇なのでエルフィーナと雑談に興じてみる。
正直、雑談なんかはあまり得意なことではないのだが、この暇を持て余し続けるよりはました。

「私も実際には見たことがないのですが、本などの伝承では…体長２０メートルを超し、以外と細身で縦長のようです。肉体を覆う鱗はあらゆる魔法を無効化するとか。あとは…龍の爪は次元を切り裂く能力を持つを言われています」
「次元を切り裂く？」
「ええ、なんでも龍の爪で切り裂かれた人が忽然と消えたようなんです。それがどういう理屈かは解明されてなく、次元を切り裂くというのも本当の所は分からないんです」
「なるほどな…で、他には？」
「なにぶん資料が少なくて…それくらいしか、申し訳ありません」
「え、美少女になったりしないの？」
「は！？び、美少女ですか？そ、それは聞いたことないです」

なん…だと…。
い、いや焦るな…。
し、資料が少ないだけでなる…はずだ！

そんな馬鹿な事を延々と考えながら、その日は過ぎて行った。

ワキナ共和国へ（後書き）

今回の文章は酷いです。
本当に申し訳ありません！

次は長さ、質ともに向上できるように努力します！

ご意見・ご感想どしどしお待ちしております。

俺の信念・彼の狂気　？

今日も今日とて朝日が燦々と大地を照らす旅日和。
俺の心は曇り空。
ああ、無常。

「……」

男女三人の楽しい旅。
それは始めだけだ。
三日も経つと、疲労が蓄積し、何もかもが嫌になる。
それだけならまだいい。

「……」
「……」

誰も喋らない。
平坦な道以外に何もないがゆえに話題がないのだ。
初めて国から出たこともあり、あれだけ楽しそうにしていたエルフィーナでさえ、もう数時間口を開いていない。
唯一、元気そうなエリスキーはひたすら無言で歩き続けるだけ。
この暗く淀んだ空気に気づいていないのだろうか？
こういう状況をどうにかするためにお前はいるんじゃないかと小一時間問い詰めたい。
俺の中に僅かの殺意が生まれる。

「むっ」

エリスキーが突然足を止め、周囲を見回す。

「どうしたのですか？」
エルフィーナが力にない声で問いかけた。
「いえ…何やら殺気が…」
「殺気…ですか？」
「ああ、お気になさらず。どうやら勘違いだったようです」
「そう…」
ふと、エリスキーが何かに気づく。
「何やらお元気がありませんね。お疲れですか？」
「はい…。ごめんなさい」
「いえ！とんでもありません！気づかない私が悪いのです！さぁ、こちらにどうぞ！」
エリスキーは慌てた様子でエルフィーナを近くの木陰に移動させる。
――――この時、殺気に気づかなかったのが、俺達の最大のミスとなるのだった。
「ふぅ…」
エルフィーナは大きな溜息を吐く。

よほど疲れていたのだろう。
しかし、それも無理からぬ事だ。
外に出たことがほとんどないということは、そのまま体力がないことに直結する。
箱庭で育てられてきたエルフィーナにとって、今回の旅は相当な重荷のはずだ。
それを表に出さずに平気そうな顔を作っているのがエルフォイーナなりの王女としての品格なのだろう。

風が吹く。
清涼な風。
三人の風を撫でる。

「……」

今度の沈黙は重くない。
しばらくはここで休憩するか。
それほど急がなければならない旅でもない。

「――――っ！？」

清涼な風。
その心地よさの中に――――違和感があった。

ガキンッ！

鋼と鋼がぶつかりあう音。
火花を散らしあうその衝撃は、俺が咄嗟に振り上げた刃から溢れだす。
旅立ちとともに国王に手渡された宝剣。

歴代の勇者が振ってきたとされる神代の剣だ。
その神秘的とも呼べる輝きの向こう側に暗く淀んだ瞳が見える。
憎悪とも怒りとも悲しみとも憐れみとも違う。
――――狂気だ。
そこには、おぞましい狂気と殺気を乗せた剣を振るう男の姿があった。

「てめぇ…」
「……」

ギリギリと一瞬の鍔迫り合いによる拮抗のあと、男は重力を無視するような動きで飛び退く。

「棗様！」

エルフィーナの悲鳴が聞こえる。

「離れてろ！」

俺はそんなエルフィーナを一喝すると、エルフィーナは悔しそうな顔をして、素早く俺の後ろに回り込んだ。
エリスキーはすでに戦闘態勢を整え、男に厳しい視線を送っている。

「お前…誰だ？」
「ふふ…ああ…ああああああ」

俺の問いかけに意味ある言語が返ってくることはなく、変わりに嗚咽のように声を漏らす。
どうやら、完全に逝ってしまっているようだ。

何にせよ、気の抜けない事態になったということだけは間違い用のない事実であった。

俺の信念・彼の狂気　？（後書き）

短いです。
本当にごめんなさい。
短期のアルバイトをほぼフルでシフトいれたため、時間がとれません。
なので、今月の終わりぐらいまで更新はできないかもしれません。
今月中にもう一回は必ず更新するので、お待ち頂けると嬉しいです。

ご意見・ご感想お待ちしてます。
ありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9932j/

外道勇者の華麗なる旅路

2010年10月11日04時17分発行